国連フォーラム：みんなでつくる

カンボジア・スタディ・プログラム報告書

期間：2012 年 8 月～2013 年 2 月

（カンボジア滞在期間 11 月 17 日～25 日）

目次

第１章　はじめに 3

第２章　渡航前事前勉強会 4

第１節　第１回勉強会 4

第２節　第２回勉強会 6

第３節　第３回勉強会 8

第４節　第４回勉強会 10

第３章　現地プログラム 12

第１節　概要・全体マップ 12

第２節　ブリーフィング 13

第１項　アジア太平洋地域の食料安全保障について（FAO アジア太平洋地域代表兼事務所所長：小沼 廣幸さん） *13*

第２項　ユネスコの文化遺産保存と当該国への影響・意識について（元ユネスコ職員、JSPS バンコク事務所長：山下 邦明さん） *14*

第３項　MALIS プロジェクト概要について（FAO カンボジア事務局プロジェクト・マネージャー：Iean Russell 博士） *15*

第４項　農民の収益向上への農協の取り組みについて（6 名の農協運営メンバー） *16*

第５項　カンボジア特別法廷と国際刑事裁判について（UNAKRT 捜査判 事部分析ユニット長：藤原 広人さん、UNAKRT 広報官：前田 優子さん） *17*

第６項　警察訓練支援の人身取引取り締まり強化プロジェクトについて：カンボジア内務省長官兼 LEAP プロジェクト議長：Prum Sokha 内務省長官） *18*

第７項　カンボジアでの地雷問題と開発について（JMAS カンボジア事務所：渕上 浩美さん） *19*

第８項　クメール・ルージュ政権下のジェンダーに基づく暴力被害者を対象としたプロジェクトについて（CDP コーディネーター：Savorn Duong さん） *20*

第３節　見学・ツアー 21

第１項　世界遺産アンコール・ワット・バイヨン 2 時間遺跡巡りツアー（JASA 広報担当：吉川 舞さん） *21*

第２項　アンロンベンのタ・モク博物館見学（元兵士の方より施設の説明） *22*

第３項　FAO が実施する保護池での魚の品種保護活動の見学（Iean Russell 博士からの説明） *23*

第４項　かものはしプロジェクトのコミュニティーファクトリー支援活動の見学（かものはしプロジェクト現地駐在員：亀山 菜々子さん） *24*

第５項　UNESCO 世界遺産候補サンボー・プレイ・クック遺跡ツアー（JASA 広報担当：吉川 舞さん） *25*

第６項　キリング・フィールド見学 *26*

第７項　トゥール・スレン虐殺博物館見学 *27*

第４節　経験・交流 28

第１項　アンロンベン地区における小学校の訪問（小学校の生徒約 30 人との交流） *28*

第２項　アンロンベン地区における稲刈り体験（村長の家で農村の人々約 30 名） *29*

第３項　クーレン地区での農村宿泊体験（水も電気もない村での宿泊） *30*

第４項　クーレン地区のヘルスセンター訪問（現地の医師・看護師とのQ&A） *31*
第５項　クーレン地区のフィールド・ファーマー・スクール訪問（フィールド・ファーマー・スクール実施者宅を訪問） *32*
第６項　オークルカエ村での農村宿泊体験（水も電気もない村での宿泊） *33*
第７項　「中田厚仁さん」の軌跡（通称"アツ村"に住む村人とのQ&A） *34*
第８項　CSP 現地参加者全体でのディスカッション(現地渡航者 25 名によるディスカッション) *35*
第４章　運営報告 36
第１節　プログラム実行委員会組織概要 36
第２節　プログラム策定 37
第３節　ロジ手配 39
第４節　会計報告 42
第５節　現地での保健・健康状況 44
第６節　参加者による事後アンケート内容と結果 44
第７節　ソーシャル・メディアの活用とアウトリーチ 46
第８節　事後報告会の実施状況 46
第５章　次回に向けて 48

第 1 章 はじめに

国連フォーラム主催「カンボジア・スタディ・プログラム（CSP）」では、2012 年 11 月 18 日～24 日の日程で 25 名の参加者がカンボジアの FAO による農村での食糧安全保障事業、NPO 法人かものはしプロジェクトの人身取引対策事業、ユネスコの世界遺産候補となっている遺跡、国連平和維持活動（UNTAC）職員であった中田厚仁さんの軌跡、トゥール・スレン虐殺博物館、キリング・フィールド、カンボジア特別法廷などの現場を訪問しました。

主催した国連フォーラムでは、メーリングリスト、勉強会及び投稿エッセイなどの知的意見交換の場の他、実際に現地での活動を訪問する「スタディ・プログラム」を 2010 年より企画・実施しています。2010 年の第 1 回は、東ティモールへのスタディ・ツアーを敢行し、翌年にはタイ王国メーホンソーン県への「タイ・スタディ・プログラム 2011」を実施しました。公募で応募した有志と共に途上国の現場を訪れ、国連や国際社会の支援の現場に触れることで、その地域の課題や国連の活動原則、国際社会の援助手法など学ぶ機会を提供しています。

本年は、「みんなでつくるカンボジア・スタディ・プログラム（CSP）2012」と題し、カンボジアを訪問しました。CSP では、国連フォーラムの幹事会や実行委員会が全てをお膳立てするものではなく、参加者が決まった時点で一人一人がロジ手配や広報、勉強会などの役割を担い、「みんなでつくる」ことを大きな原則として、事前及び事後のプロセスを含めた約半年間のプログラムとして実施しました。

渡航前には、カンボジアでジェノサイドが起こった原因、国連 PKO と日本の貢献、人身取引をめぐる現状と国際的取組み、農村開発と MDGs をテーマに 4 回の勉強会を実施しました。そして、訪問した現地では、紛争後の社会の国連と国際社会、市民社会の役割、現場での課題や現状など紛争後のカンボジア社会がどのように復興しているか、開発への課題は何か、国連や国際社会がどのような支援をしているかなどを学びました。

2012 年 11 月 21 日 Cambodia, Atsu Village にて

本報告書は、渡航前事前勉強会、現地プログラム、運営報告、次回スタディ・プログラム開催の予告という構成になっており、本プログラムで私たちが体験した学びを共有することで、理解をさらに深めることを目的としています。また、今回のプログラムを通して学んだ反省点や改善点を含め、次回開催予定のスタディ・プログラムに貢献できることを願っております。最後に、本プログラム実施においてご協力いただいた皆様に心より感謝を申し上げます。ありがとうございました！

CSP 参加者一同

第２章 渡航前事前勉強会

本プログラムでは渡航前に、カンボジアでジェノサイドが起こった原因、国連 PKO と日本の貢献、人身取引をめぐる現状と国際的取組、農村開発と MDGs のテーマで 4 回にわたる勉強会を実施しました。本勉強会では、東京と関西に会場を設けた上で、世界各国に散らばる参加者とはビデオチャット機能を持つ Google+ハングアウトで回線を繋ぎリアルタイムで開催しました。また、各勉強会には専門の講師をお招きし、東京・大阪会場では終了後に講師及び参加者を含めた交流会も実施しました。以下各勉強会での勉強会概要と質疑応答、参加者の声を掲載致します。

第１節　　第１回勉強会

テーマ：「ジェノサイドと紛争後の正義、クメール・ルージュ特別法廷」

実施状況

第 1 回事前勉強会は、2012 年 9 月 29 日（土）14 時～17 時の日程で、25 名の参加者が①カンボジアで大虐殺が起きた原因、②カンボジア特別法廷の果たす役割と残された課題・取り組みについて勉強し、参加者のうち 2 名がプレゼンテーションを発表しました。講師には、弁護士兼ヒューマン・ライツ・ウォッチ（Human Rights Watch: HRW）日本代表を務め難民問題などの国際的な人権問題に取り組む土井香苗さんをお招きしました。

緊張の第 1 回目勉強会…！　@Tokyo

勉強会議事録

カンボジアではポル・ポト政権が発足した 1975 年から 1979 年の間に総人口 800 万のうち実に 200 万人から 300 万人近くの人間が虐殺された前代未聞の大量虐殺の歴史がある。その背景には、国内の党派闘争の過激化したこと、ベトナム戦争の攻撃がカンボジア国内へ飛び火したこと、当時の共産主義の思想の広まりなど様々な要因が重なり合った結果とされている。

1979 年ベトナム軍の進攻で崩壊した紛争後のカンボジアでは、包括的な政治解決に関する協定を定めるパリ和平協定が成立された。また、国際連合とカンボジアが協力し、新たな憲法と議会を創立し、新政権を発足させた。1993 年正式にカンボジア王国の成立、その後ポル・ポト政権下での大虐殺等の重大な犯罪について、政権の上級指導者・責任者を裁くことを目的とした「カンボジア特別法廷（Extraordinary Chambers in the Courts of Cambodia：ECCC）」を設立。国連の関与の下、2006 年 7 月に運営を開始した。ECCC は、①当事国の関与が強い、②二審制を採用、③30 年経た後に開催、④裁く対象が明確という特色を持つ裁判所である。また ECCC は、①正義、法の支配の実現、②カンボジア国民にとっての和解・融和の促進、③将来の司法制度に与えるモデル効果、④司法に対する一般国民の信頼強化、⑤国際刑事法の発展に関する貢献の役割を担っている。

第 1 回勉強会東京会場の様子
皆さん真剣です@Tokyo

2012 年現在までに、5 人の被告人が起訴され、うち 1 名の有罪判決が確定した。1 名は認知症のため現在裁判が停止しており、その他の 3 名については裁判が現在も進行中である。しかし、同時に①関係者の高齢化、②被害者の訴訟参加、③言語の問題、④予算など今後の課題点も残されている。

質疑応答一部抜粋（Q: Question, A: Answer）

Q1：ECCC を構成する外国人の裁判官はどういった国の人がいるのか？（東京会場参加者：田中さん）

A：ECCC の裁判官には、日本人裁判官の野口氏がいる他、調べたところ、スリランカ、アメリカ、ポーランド、フランス、オーストリア、カナダ、オランダの国からの裁判官がいた。（発表者：木曽さん）

質疑応答の時間を設けました@Tokyo

Q2：ECCC ではなぜ二審制が採られたのか？（東京会場参加者：花村さん）
A：多くの国で三審制が採られている理由は、被告人の人権保障のため、裁判をより慎重に行う必要性を考慮したものと理解しているが、ECCC で二審制が採られた理由は、時間の経過とともに証人・証拠が失われていくので、早期の裁判を進める必要があった点と、人権保障の観点との妥協の結果ではないかと思われる。（発表者：木曽さん）

Q3：ECCC について、カンボジア国民はどの程度の興味・理解があるのか？（東京会場参加者：松崎さん）
A：確かなデータはないので認知度がどれほどかは正確にはわからないが、認知度を高める活動を行う NPO が存在する他、ラジオを利用した認知度向上の活動もみられる。（発表者：木曽さん）

Q4：カンボジアの大虐殺では有識者が多数虐殺された。ECCC ではカンボジア人の裁判官が外国人裁判官より多く 17 名いたが、どのような人がなったのか？また、東京裁判の裁判官は全て外国人で構成されていたが、なぜ ECCC では裁判官が全て外国人にならなかったのか？（大阪会場参加者：岡見さん）
A：大虐殺で知識人が多数虐殺された中カンボジア人の裁判官はどのような人が務めたのかという点については、大虐殺後、時間が経ち、その間日本などが司法整備の支援を行ったこともあり、ECCC が始まった頃には裁判官を務める有識者が育ったのではないかと思われる。ECCC のカンボジア人裁判官は、司法に携わる人の中で最も優秀な人が務めている。また、ECCC が東京裁判と違い、裁判官が全て外国人にならなかったのは、フンセン首相がもともと ECCC に対し否定的な考えがあったため、国際判事だけで構成されることに抵抗があったから国際判事よりカンボジア人判事の人数の方が多いのではないか。（講師：土井さん）

講師の土井 香苗さんから

カンボジアで起きた重大な人権侵害は、被害者にとって大きなトラウマになっているので、ECCC の成立は非常に重要であった。ECCC が設立した時期は遅かったが、被害者としては、法の下の公正な裁きがされたことが一つの区切りになったと思う。全てのリーダーが、自分の身を守るために法律を破っていいか、人道に対する罪を犯していいかを考えるとき、自分が裁きにかけられることが秤にかけられる世界が来ることは最低限必要だと思う。人権というとテクニカルな話が多く、法学を専攻していない人にとっては馴染みにくい内容だと思うが、カンボジアで起きたような人権侵害が将来にわたり起こらないようにするためにも、重要な分野であるので、前向きに考えてほしい。ECCC の運営資金最大拠出国は日本であるが、内容的な貢献はまだ十分できていないと思う。今後、法律の分野に進む人は積極的に活躍されることを切に願う。

©UN FORUM STUDY PROGRAM

参加者の声：小林 真由美さん

私は、第 1 回勉強会のマネージメント全般を担当し、プレゼンテーターと一緒に、プレゼンテーションの事前準備をする他、当日の司会進行を担当しました。第 1 回勉強会のテーマは、「ジェノサイドと紛争後の正義」という難しいものだったので、参加者にも事前の予習が求められ、個人的には、講師である土井さんから紹介された、Human Rights Watch の報告書等を読んで、勉強会に臨みました。勉強会では、2 人のプレゼンテーションと土井さんの講評を受けて、ポル・ポト政権下でどのようにしてジェノサイドが起き、その後いかなる対処がとられたのか、とりわけカンボジア特別法廷の取り組みについて学びました。かなり専門的な内容でしたが、土井さんがポル・ポト政権下の出来事を国際的な時代背景と一緒に解説してくれたので、よく理解できたと思います。

©UN FORUM STUDY PROGRAM

第２節　　第 2 回勉強会

テーマ：「カンボジアにおける国連平和維持活動、日本と日本人の貢献」

実施状況

第 2 回事前勉強会は、2012 年 10 月 13 日（土）14 時～17 時の日程で、23 名の参加者が「カンボジアにおける国連平和維持活動（PKO）、日本と日本人の貢献」をテーマに勉強し、参加者 3 名がプレゼンテーションを発表しました。講師には、内閣府国際平和協力本部事務局で研究員をされている栃林昇昌さんをお招きしました。

第 2 回勉強会が始まります…！
みなさん準備万端です@Tokyo

勉強会議事録

国連平和維持活動（United Nations Peacekeeping Operations：国連 PKO）とは、国際政治の制約の中で世界各地における紛争の解決のために国連が行う一連の活動のことである。主な業務として、平和維持隊による停戦監視・兵力引き離し、停戦監視団による停戦監視といったものがあるが、冷戦後は文民警察活動や、選挙、復興・開発、組織・制度構築を含む行政的支援などの活動に移行してきている。

大きなトラブルもなく…オンラインを活用した大阪からの発表が始まります@Tokyo

カンボジアでは、包括的な政治解決に関する協定を定めるパリ和平協定の合意を履行するために 1993 年安保理決議 745 によって国際連合カンボジア暫定統治機構（United Nations Transitional Authority in Cambodia：UNTAC）を設立。戦後のカンボジアにおいて人権と自由を認める公平な選挙の実施、紛争の調停、文民行政、法と秩序の維持、カンボジア難民の本国帰還・再定住、カンボジアのインフラ復旧を任務として新政府樹立までの 1993 年 9 月まで活動した。現在それらの活動は、カンボジア政府、及び NGO が引き継いでいる。

日本では、1992 年 6 月国際連合を中心とした国際平和のための努力に積極的に寄与することを目的とした PKO 協力法を定め、物資協力、経済協力、技術協力など様々な分野において援助をしてきた。また、現在 PKO では、人・資源・資金不足が問題になっており、特に人材養成に力を入れている。例として 2005 年には内閣府の事業の 1 つとして国際平和協力研究員制度を整え、国際平和協力分野における人材育成と機能強化に向け、現在 7 名が活動をしている。

質疑応答一部抜粋（Q: Question, A: Answer）

大阪会場はこのような感じです@Osaka

Q1：紛争後市民が政治に関心を持つことが復興の鍵という事だったが、どのようにしたら市民が政治に関心を持つようになると考えるか？（ハングアウト参加者：池田さん）

A：PKO 活動は紛争地域の当事者間和平合意後に開始するが、その時は政治機構が曖昧なため新しい政権にする選挙が必要となる。1990 年に初めて PKO による選挙支援がナミビアで行われたが、この取り組みは監視型から復興型への移行を意味するものとなった。選挙を行う際には、有権者教育といって選挙の意味や政治参加の方法などを一般市民に教えているので市民も民主的な政治について学ぶことができる。（講師：栃林さん）

Q2：投票率を上げるのは難しいと言われているが、実際にはどのような支援活動を行っているのか？（東京会場参加者：桑田さん）

A：PKO の選挙支援活動は Pre-election（準備：長い時間を必要とする）、Election（選挙当日）、Post-election（選挙後）という 3 つのサイクル支援を行っておりで多岐に渡る活動を行っている。2007 年に行った東ティ

モールは成功例である。独立前の選挙は国連が行ったため、2007 年には東ティモールが主体となって選挙を行った。選挙前や有権者教育など多岐に渡って行った。2008 年には UNDP と合意し、持続して支援を行っている。（講師：栃林さん）

発表中（参加者の藤居さん）@Osaka

Q3：明石康さんの「日本と国連の 50 年」という本には UNTAC の成功理由として国連放送局が挙がっているがどういうものなのか？また、国内で 1 つ以上の言語が使われている場合はどのように広報を行っているのか？（講師：栃林さん）

A：PKO 活動には現地住民の支持が大切なため広報は重要となっているが、そもそも紛争国や途上国等の識字率が低い場合はテレビも普及していない事が多く AM ラジオによる広報は効果的である。パキスタンの例ではあるが、例えば現在パキスタンとアフガニスタンの国境ではパシュトー語が主な使用言語であるためウルドゥー語との両方の言語で行うようにしている。また戦争を行わないようにといったメッセージを直接的に表現するのではなく、ドラマのストーリーの話の中に要素として入れて人々が関心を持つような活動も国連を通じて実施されている。（パキスタン在住国連職員：田瀬さん）

Q4：現地の人の理解必要という話と日本の自衛隊の武器の使用制限の話があったが現地住民は PKO 派遣の軍隊についてどのような印象を抱くのか？（東京会場参加者：大橋さん）

A：武器があるからといって敵とみなされることはあまりなく、外国人だからという理由で友好的な場合が多い。現地の人々は日本の任務遂行に制限があることは知らないが、日本の部隊の仕事の質は良いので非常に評価が高いと聞いている。（講師：栃林さん）

勉強会終了後は、講師の栃林さんも交え交流会を開催しました！@Tokyo

講師の栃林 昇昌さんから

©内閣府

PKO 実施の際には国内・国際法の法的根拠と国連交戦規定（ROE）の重なり合う部分しか行えない。現在 PKO 法改正の動きもあり、武装解除・動員解除・社会復帰(DDR)、政府支援、ジェンダーといった分野とどのように関わっていくかが検討されている。また、政府開発援助において国際協力機構（JICA）のプロジェクトと自衛隊のコラボレーションが検討されている。任務連携では自衛隊が民間セクターや NGO に呼びかけているが、特に NGO は活動に中立性を保つ立場にあるので難しい。しかし、国際的に行われていることであるし、日本は「オールジャパン」として取り組むべき課題だと思う。今後は、一般市民にどう PKO 活動を普及させていくかが重要になってくるであろう。PKO 活動の第一世代は国と国のレベルでの争いであったが、以降は国内紛争となったため一般市民も重要なアクターとなった。また、政府レベルだけでの平和構築ではなく草の根活動での PKO 活動は今後活動を成功させるために必要になってくると言える。

参加者の声：神田 恵梨さん

私は熊本県からの参加でしたが、本勉強会のコーディネートを担当し、勉強会開催の 3 週間前から発表者のプレゼン構成のサポート、参加講師との調整、勉強会のスケジュール作成をメールベースで取り組みました。このように遠隔地からでもインターネット環境さえあれば、プログラムに参加出来ることは本プログラムの非常に良い点だと思います。今回の勉強会では、国連 PKO とは何か？という基本的な概要から変わりつつある活動の様子、講師でお迎えした栃林さんの専門知識と経験からのお話も伺うことが出来て、とても充実した勉強会になりました。そして、それら知識を踏まえた上で、実際にカンボジアへ渡航し現地で訪問した笑顔いっぱいの子ども達が出迎えてくれた「アツ村」や現在もカンボジアで地雷除去活動を行っている NGO の「JMAS」でのブリーフィングは感慨深いものになりました。事前にテーマに沿った内容で勉強をしたからこそ現地カンボジアにてより深い学びを得ることが出来たと思っています。

©UN FORUM STUDY PROGRAM

第３節　　第３回勉強会

テーマ：「人身取引と児童の商業的性的搾取、規範的枠組みと具体的取組み」

実施状況

「人身取引と児童の商業的性的搾取、規範的枠組みと具体的取組み」をテーマに、2012 年 10 月 27 日（土）に第 3 回勉強会が開催されました。3 名の参加者が各テーマについての発表し、その後 NPO 法人かものはしプロジェクト理事長の村田早耶香さんからカンボジアの児童の人身売買を防止するために現地での取組みを紹介していただきました。

勉強会議事録

カンボジア国内では農村から観光地や首都プノンペンへ子供たちが売られることが非常に多く大きな社会問題となっている。また、カンボジアは人身売買の「送出国」であると同時に、「受入国」でもある。農村では貧困が深刻化しているため、幼い 10 歳未満の子どもが親に売られる、職を紹介するという口実で仲介者に勧誘され、買春宿に連れて行かされる深刻な人権問題が数多く発生している。

勉強会もいよいよ後半に突入です！@Tokyo

観光業の成長に伴い、子どもを求めるために多くの外国人観光客がカンボジアに来ているデータもある。子どもを売春宿で強制的に働かせたり、反抗する子供に処罰したり、HIV 感染の子供を捨てたりすることも実際起きており、事態は深刻である。子どもの権利が国際条約に保護されているにもかかわらず、このような「最悪の形態の労働」がなされていることはあってはならない。

このような人身売買や児童買春を防止するために、国連児童基金（United Nations Children's Fund : UNICEF）、国際移住機関（International Organization for Migration : IOM）、国連開発計画（United Nations Development Programme：UNDP）、国際連合婦人開発基金（United Nations Development Fund for Women : UNFEM）などの国際機関が政策・予防・訴追・保護の分野から様々な取り組みを実施している。カンボジア政府も女性と子どもの人身取引、密輸、搾取、性的搾取撲滅計画キャンペーンや、人身取引性的搾取禁止法の制定、売春宿や性産業の取締強化、教育の強化などの活動を実施する。他にも、かものはしプロジェクトのような NPO 法人も現地に出向き、雇用の創出、人身売買防止のための活動をしている。

質疑応答一部抜粋（Q: Question, A: Answer）

Q1：カンボジアは国際的な組織犯罪の防止に関する国際連合条約に批准しているのか？（大阪会場参加者：岡見さん）

A：2001 年に署名・批准している。しかしながら、カンボジアは条約の批准は早いがインプリメンテーションが遅いことが問題である。（パキスタン在住国連職員：田瀬さん）

休憩中にはパキスタンと大阪会場で会話をする光景もあったり…♪@Osaka

Q2：強制労働をめぐる国際的枠組みでは、それぞれの対策や提携はどの主体がどうやろうとして決まったのか？（大阪会場参加者：岡見さん）

A：1996 年に行われたストックホルム会議では、2000 年までに行動計画を作ろうということが決まったが、法的拘束力がないために、実際に作った国は少なかった。ストックホルム会議はこれまでの会議と違い、主権国家と国際機関と NGO が対等な立場で参加したということで画期的な会議であった。国連の規範作りに NGO と国が一緒になって作成したインパクトはとても大きい。基本的に国際的な規範は主権国家がリードして作ってきたといえるが、1996 年のこの世界会議では市民社会から規範作りの必要性が強く発せられたという点で大きなターニングポイントとなった。（講師：村田さん）

人身取引は、予防、犠牲者支援、加害者訴追も含め極めて多角的な問題である。対処の方法としても法律的にも教育的にも多角的。行動の変化、マインドの変化を起こさないといけない。一時的にどのくらい被害者が減ったということも重要だが、プロジェクトには必ず期限があるので、そのプロジェクトが終わった後にコミュニティにどのくらいインパクトを残せたかということのほうが重要。国連の取り組みについて、正確にインパクトを図る方法はまだしっかりと確立されていない。コミュニティを支える制度に国際社会は影響を与えられているのか。そのあたりは数値化されていないのが現状である。（講師：村田さん）

第 3 回勉強会では代々木のカンボジア料理専門店「アンコール・ワット」でオフ会も開催し、たくさんの方にお越しいただきました！

Q3：人身売買は、現状として減っているのか、それとも本当に減少し、状況は改善されているのか？こういった問題は取り締まりが厳しくなるほどアンダーグラウンドに入り、リーチしづらくなるといった現状にあるので、その点を考慮して伺いたい。（ハングアウト参加者：石井さん）

A：カンボジアに関しては、取り締まりが厳しくなっているのでアンダーグラウンド化しているのだが、数としてはかなり減少している。私たちは、良い手段ではないかもしれないが、実態調査のため、客のふりをして売春宿に行き、子供が出てくるかを調べることもある。2007 年の調査ではプノンペンで子供が出てきたことがあり、より戻しが起きているようだったが、2010 年に行った調査では、子供が出てくることはなく、特に 10 歳未満の子供を買うことは難しい状況になっていた。（講師：村田さん）

講師の村田 早耶香さんから

©かものはしプロジェクト

大学生の頃、初めて人身取引被害者の保護施設を訪れ現状を目の当たりにした。10 年間この仕事に携わり、人身取引を根絶するには需要と供給をなくすことが必要であるという結論に至った。供給をなくすには、大人には仕事を作り、子供には教育を施すことが必要だと考えた。仕事で月に 30 ドル以上の収入があれば、子どもは売られずに済む。需要をなくすには、警察の取り締まりが厳しく適正に行われるべきだと考え、カンボジア内務省に対し取り締まりのための予算が足りない分の資金援助も行った。問題解決とビジネスモデルの確立とどちらが優先かというと、問題解決であり、需要と供給がなくなる取り組みを今後も行っていきたい。

参加者の声：陳 穎さん

勉強会に参加する前に、インターネットで人身売買や児童買春を調べたり、かものはしプロジェクトのウェブサイトを読んだりしていました。勉強会では特に役割を担っていませんが、ウェブページに勉強会開催情報や資料の掲載・更新をしていました。アジアの国々に、毎日平和で楽しく学校を通っている子供がいる一方、強制し「労働」させられてこんなに苦しんで生きていく子供がいると知って、強いインパクトを受けました。この問題を取り組む時に、売るほうを取り締まっても、需要（買う方）がいる限り、人身売買が徹底的に無くすことができないこと、同時に売られる方に生活していく技能を提供する必要があることを学びました。

©UN FORUM STUDY PROGRAM

第４節　　第４回勉強会

テーマ：「MDG、UNDAF とカンボジアの開発状況、FAO の役割」

実施状況

第４回事前勉強会は、11 月 10 日（土）14 時～17 時の日程で 21 名の参加者が、①MDG s（ミレニアム開発目標）について、②カンボジアの開発状況について、③カンボジアにおける FAO の活動、その果たす役割を勉強しました。本勉強会では、参加者３名がプレゼンテーションを発表し、講師に大阪大学環境イノベーションセンターにて勤務、主にサステイナビリティ学・環境経済学を専門とされている上須道徳さんをお招きしました。

大阪会場では「初」となる講師の先生を会場にお招きして渡航前最後の勉強会が始まります～！@Osaka

勉強会議事録

ミレニアム開発目標は、1990 年代に開催された主要な国際会議やサミットで採択された国際開発目標を統合し、1 つの共通の枠組みとしてまとめたものである。人間の基本的なニーズを満たし、その能力を開発することを目指した 8 つの目標を 2015 年までに達成しようと国際連合や各国政府、NGO など様々なセクターが取り組んでいる。カンボジアでは政府が主体となって信用のできるデータ作りを基礎に経済成長（GDP 底上げ）による貧困削減を目指すアプローチを取る。

カンボジアは数値で見ると着実に GDP 成長率を上げているが、近隣諸国と比較するとその発展率は他国より劣っている。また、農業が主流なカンボジアの特に農村地域では変化しやすい天候、インフラの未整備、農村地域の技術導入の遅れ、及び農業投入財へのアクセス制限が経済成長の妨げとなっている。これらに対応するためには国際社会、政府や地方での政府・機関、現地の人々、それぞれのアクターの連携が重要とされている。

東京会場、発表者の藤田さんと桑田さん@Tokyo

カンボジア発展における国連の参入に関して、「各国家の開発上の優先課題に国連システムとしてどのように協働しつつ対応してゆくかについて述べた戦略的プログラム枠組み（UN Development Assistance Framework：UNDAF）」というものがある。これは国連システム全体がその国の政府支援のために何をするのかを書いたものである。本フレームワークにおいては資金を投入してインフラ整備に徹するよりも主に政策的な助言や技術的なサポートの役割を担っている。

「カンボジアの開発とはなにか？」難しい問題に皆さん熱心に耳を傾けています@Tokyo

質疑応答一部抜粋（Q: Question, A: Answer）

Q1：カンボジアでインフラの整備が進まない要因は、お金なのか技術なのかもしくは計画に問題があるのか？具体的にはどういう風な障害があるのか？（大阪会場参加者：清さん）

A：カンボジアは日本のような地方税の概念がなく国内の財源、税制が未整備である。そのため国家が集めて州や郡やコミューンに再分配をしているものの地域に回すお金がないという現状もある。そのため、国際機関や NGO に依存する、またコミューンが何か行う際には公共事業負担金を直接住民から回収しているという状況もあった。（元地方公務員：坂本さん）

Q2：日本のカンボジアに対する支援は 150 億円との事であったが、借款と無償はどのくらいの割合なのか？（ハングアウト参加者：田瀬さん）

A：無償支援は約 30 億円である。だいたいの内訳としては人間開発が 3 億円、洪水対策が 15 億円、医療約 4 億円、ノンプロジェクトが 6 億円となっている。また、2012 年 3 月の洪水の際には 70 億円の支援もしている。（発表者：中原さん）

Q3：GDP が農村の実態を反映しているとは限らない事は多々あると思うが、その点について伺いたい。（ハングアウト参加者：坂本さん）

A：データの裏側を考える上で大切なのはそのデータの計算方法や定義である。GDP では市場に回らないと入らないため、環境に悪影響を与える労働が入って家庭内労働は入らないという現実もある。また、農村では自家消費は入らないため農村がきちんと発展していればそんなに貧しい印象もないのではないだろうか。（講師：上須さん）

渡航前最後の勉強会、再来週にはカンボジアで全員合流します♪@Osaka

Q4：カンボジア FAO が実施する MALIS project では栄養面の改善とあるが、具体的な取り組みなのか？（大阪会場参加者：岡見さん）

A：FAO の農業支援では農作物の多様化を行っている。この支援では農民の口にするものが増え栄養摂取がより行える様になる、リスク分散（お米がだめなら収入がゼロという可能性がなくなる）、収入の増加といったようなメリットがある。さらに家畜を飼えば良い結果が得られる。MALIS project に関しては資料に包括的な食事とあるように、お米だけではなくもっと食のバラエティを増やすことを目指している。子供や乳幼児のいる母親に教育するなど家庭内での栄養改善に努めている。（発表者：藤田さん）

講師の上須 道徳さんから

まず、作物を作るにしても協力して行うが、共同体としての在り方に注目するとまた違う事が見えてくるのではないだろうか。また、本当の生活をしている人々にデータはどのように影響しているのか考えて欲しい。水へのアクセスが困難と言うと、飲み水がないという表面的な情報だけではなく、その背景には女性が遠い所まで水を汲みに行く、衛生状態悪いなど背景まであるかもしれない。アイヌ語には「やいこしらむすえ」という言葉があり、「自分自身に対して心を揺さぶるという事で考える」という意味である。知識を詰め込むことは簡単であるが、心を揺さぶるほど考えることは少ない。勉強会等で得た知識を実際に現地で見て、ぜひ自分の心を揺さぶってみてほしいと思います。

©UN FORUM STUDY PROGRAM

参加者の声：中原 隆伸さん

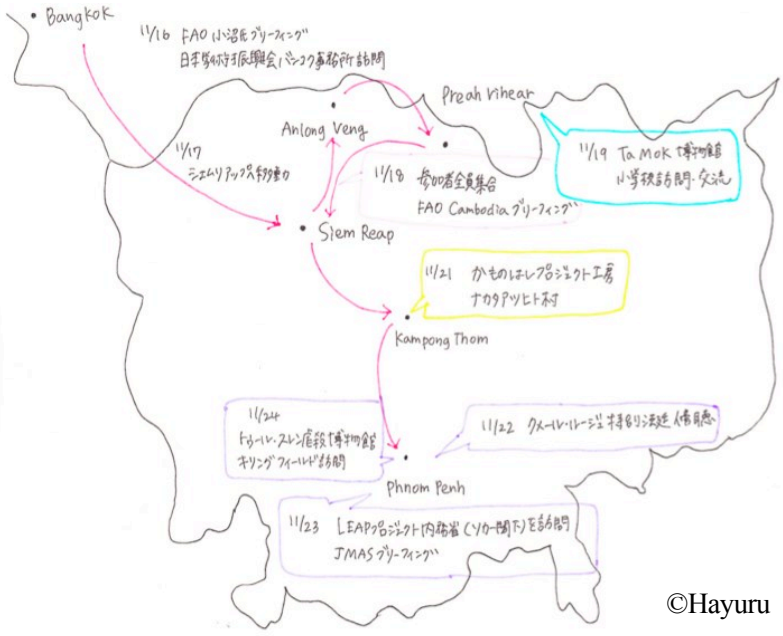
第 4 回勉強会でプレゼンを担当しました。南スーダン在住のためハングアウトでの参加だったのですが、別のハングアウトに参加した際ネット環境の悪さからか全くつながらず、当日ちゃんと参加できるか不安でした。万一の時は録画済みのリハーサルを流してもらう手筈を整え勉強会本番に臨んだところ、場所を変えた事もあり上手くつながり、海外からでも勉強会に参加出来ることを実証出来たのではと思います。学生の皆さんが凄くしっかりした内容のプレゼンを準備していたので、「社会人のメンツにかけて頑張らないと」と思い準備しましたが、大学院等の講義で習って以降余り復習の機会が無かった開発分野の基礎知識を再確認でき、大変有意義でした。

©UN FORUM STUDY PROGRAM

第３章 現地プログラム
第１節　　概要・全体マップ

2012 年 11 月 18 日～24 日の日程でカンボジアの FAO による農村（プレアヴィヒア州）での食糧安全保障事業、人身取引の撲滅と NPO かものはしプロジェクトの活動、国連平和維持活動（UNTAC）職員であった中田厚仁さんの軌跡、トゥール・スレン虐殺博物館、キリング・フィールド、カンボジア特別法廷などの現場を訪問しました。

本プログラムは現地集合・現地解散のため日程に余裕がある参加者は、現地プログラム前に乗り継ぎの経由地であるバンコクにて事前に合流し、FAO、日本学術振興会のブリーフィングなどを含むオプションツアーに参加しました。その後、オプションツアー参加者は陸路と空路に別れて、それぞれカンボジアに入国し、18 日昼にはシェムリアップにてオプションに参加しなかった参加者も合流し、現地プログラム参加者 25 名全員が集合しました。カンボジア内の移動は、基本的に 2 台のバスを現地で事前に手配し、各プログラム現地コーディネーター案内のもと下記やじるしが進む方向へと移動しました。



©Hayuru Matsuzaki

アンコール・ワット遺跡群の街シェムリアップからスタートした本プログラムは、一旦北上、カンボジア北部に位置するアンロンベン地区、プレアヴィヒア地区にて FAO による農村での食糧安全保障事業訪問や農村での宿泊体験をした後、シェムリアップに戻り、その後はカンボジア首都プノンペンを目指し南へと南下しました。プノンペンへ向かう途中には NPO かものはしプロジェクトのファクトリー訪問、国連平和維持活動（UNTAC）職員であった中田厚仁さんのアツ村、世界遺産候補サンボー・プレイ・クック遺跡などにも立ち寄りました。

カンボジアの観光地、都市部、農村地域など全てを網羅した本プログラムの総移動距離**おおよそ 950km** の大移動となりましたが、毎日が新しい場所での滞在、予定もぎっしりと詰まった内容でしたので、非常に充実したプログラムとなりました。（文責：神田 恵梨）

第２節　　ブリーフィング

第１項　アジア太平洋地域の食料安全保障について（FAO アジア太平洋地域代表兼事務所所長：小沼 廣幸さん）

実施状況

2012 年 11 月 16 日（金）14：00～15：30、現地プログラム前のオプションプログラムの１つとして国際連合食糧農業機関（Food and Agriculture Organization：FAO）アジア・太平洋地域事務所バンコクオフィスにて FAO アジア太平洋地域代表兼事務所長の小沼廣幸さんからブリーフィングを受けました。参加者は、食糧安全保障に関して現在問題となっていることや FAO の取り組みについて学びました。

ブリーフィング内容：小沼 廣幸さんの発表

FAO とは、食糧への定期的アクセスを確保し、食糧安全保障を達成することを目的として設立した国際機関である。主に、①世界の食糧・農林水産業に関する情報収集並びに情報提供、②世界の食糧・農林水産業に関する政策提言、③食糧・農林水産業分野に関する中立的討議の場の提供、④開発援助（国連世界食糧計画等と協力して行っている）、⑤技術協力の支援、⑥自然災害や紛争後の緊急復興支援と多岐にわたる活動を実施する。アジア太平洋地域は、近年飛躍的な経済成長を遂げた。

ところが、このような経済成長によって、富める人とそうでない人との経済格差が広がってしまった。その結果、現在アジア太平洋地域には、世界人口の 62%（約 3 分の 2）もの飢えた人々が存在するに至っている。このような状況を改善させるためには、食糧生産量を増加させることが必要である。

また、食糧生産量を増加させるにあたっては、種々の制約があることに注意しなければならない。例えば、耕作地を広げることが困難であること、水資源の不足が深刻になっていること、農業投資額が減少していること、原油価格・食糧価格が上昇していること、これらの価格が安定しないこと、バイオ燃料の開発による悪影響など課題も多く残る。

夜には小沼さん宅にお招きいただき、短い滞在ではありましたが素敵なバンコクステイを過ごすことが出来ました！

CSP 参加者の感想：岡見 有純さん

世界の食糧問題をとても広い視点から学ぶことができました。日本にいて、かつ、農業に携わらない私では貧困層に広がる食糧危機を考える視点を持つことは難しかったと思います。水の枯渇は学んだことがあってもその要因は自分の学んだ以上にあったなど既存の知識を更に深めることもできました。世界的枠組みからのお話でしたが、大きな問題こそ小さな成果を積み重ね、解決できるというお言葉がとても印象的でした。

今後は、視野の広がりや学びを深める姿勢をより求めて、世界と現場双方での視点から食糧問題を考えたいと思います。また、小沼さんの気さくで穏やかなお人柄に触れ、世界で必要とされる人がどんな人か知ることができたのは貴重な学びであったと思います。人と人が協働するための、とても大切な前提を教えていただきました。

第２項　ユネスコの文化遺産保存と当該国への影響・意識について（元ユネスコ職員、JSPS バンコク事務所長：山下 邦明さん）

実施状況

2012 年 11 月 16 日（金）16：30～18：30、現地プログラム前のオプションプログラムの１つとして日本学術振興会バンコク事務所にて日本学術振興会（Japan Society for the Promotion of Science：JSPS）バンコク事務所長の山下邦明さんからブリーフィングを受けました。JSPS 及び山下さんの取組みを通して、開発に関する教育のあり方を学びました。

ブリーフィング内容：山下 邦明さんの発表

山下さんは、2012 年より JSPS バンコク事務所に勤務する。現在、タイの学校における持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development：ESD）について共同研究を行っている。日本では、ユネスコ・スクール（UNESCO School）により ESD 推進を行っている。ユネスコ・スクールでは、ASP ネットワーク（Associated Schools Project Network）によるユネスコの理念に沿った取組みを実施する。ESD の源流であるサルボダヤ・シュラマダーナ運動は仏教哲学に基づく農村の自立運動である。「サルボダヤ」＝意識の目覚め、「シュラマダラ」＝労働を通じた分かち合いを意味し、スリランカのアリ・ヤラトネ氏が提唱した。

CSP 参加者の感想：藤田 綾さん

まず、国際協力の場で働くための資質のお話の中で、日本人として協調性の強みを生かしてほしいというお言葉に大変励まされ、また、学部・大学院時代に身につける専門性の大事さを改めて知った。それから、ESD の日本での取り組みの例で、防災教育が 3.11 の震災で生かされたという教訓がすごく印象的で、人権や環境、異文化理解などの教育による意識の変革について前向きな可能性を感じた。ずっと自分の望んでいた国際連合教育科学文化機関（UNESCO）の仕事に関わって、世界 110 か国を飛びまわって交渉を重ねながら成長されてきたお話や、現在も日本学術振興会でバンコクの地で活躍されている姿から、生涯かけて熱く好きな仕事に打ち込むということがとても輝かしく思えた。

私達の訪問の様子を「JSPS のホームページ（http://jsps-th.org/?p=3862）」にてご紹介いただきました。山下さん、JSPS のスタッフの皆さん ありがとうございました！

“11 月のこちらのオフィスへの訪問そして交流夕食会と楽しい時間を共有できましたこと、こちらこそお礼を申し上げます。かつては大学で教えていましたので、学生さんたちと一緒にいる時間はとても懐かしく感じますし、いっぱい若いエネルギーをもらえます。ありがとうございました。”（JSPS：山下邦明さん）

第３項　MALIS プロジェクト概要について（FAO カンボジア事務局プロジェクト・マネージャー：Iean Russell 博士）

実施状況

11 月 18 日（日）現地プログラム初日、FAO カンボジア事務局にて現地のプロジェクト・マネージャーイアン・ラッセル博士から今回訪問する FAO の MALIS プロジェクト概要に関するブリーフィングを受けました。

ブリーフィング内容：イアン・ラッセル博士の発表

今回訪問するウドンメンチェイ州のアンロンベン地区は、カンボジア北部タイの国境付近に位置し、クメール・ルージュ政権最後の拠点としても知られている。この地区は特に開発が進んでいない農村が多く所在し、村の人々は農業を主とした自給自足の生活を営んでいる。FAO カンボジア事務局はこの地域において、食糧安全保障と小自作農の市場との結びつきの改善（Improving Food Security and Market Linkages for Smallholders：MARIS）プロジェクトを発足、欧州食料安全に関するプログラム（EU The Food Security Thematic Program）の一環として 2011 年から 2015 年まで 400 億ユーロの予算で農村地区におけるプロジェクトを実施している。

本プロジェクトは、稲作技術（種子・肥料・穀物の貯蔵・機械化）の導入や農村地域での基幹インフラの整備によって農村地域の生産性と収益性の改善を目的とする。イアン博士は、外部機関の立場として与えるだけのプロジェクトではなく、農村の人々と対等な立場で一緒に出来ることを考え、最終的には農村自立・持続可能な農業の仕組み作りの構築、及び安定的な収入を得る健全な開発を促進することを本プロジェクトの最終目標であると述べた。

CSP 参加者の感想：岡見 有純さん

このプロジェクトの参加は食と栄養に関心があり、食を通じて国際貢献をしたいけれど、その具体的な映像がなかった私にそれを見せてくれる一生に残る体験となりました。また、このプロジェクトで見た活動されている方々の真剣なお姿や活動から感じられた人々の生活を支える食に携わる意義は、私に今までの学びをより深め更なる学習意欲をわかせてくれました。そして、「食」だけでなく関連するいくつもの事象があることを学び、自分の視野がとても広がりました。これから、食を中心にその他の社会問題にも目を向けより効果的な貢献を考えたいと思います。

“2012 年 11 月の国連フォーラムスタディプログラム参加者の訪問は、私たちチームにとっても大きな出来事でした。今回の訪問で、私は Otdar Meanchy と Preah Vihear の地域にある MALIS プロジェクトを訪問するコーディネートを取りましたが、私たちだけでなく現地の村の方も皆さんの訪問を非常に楽しみにしておられました。また、実際に現地の人々と同じような食事や生活をともにすることで、村人の方々も非常に喜んでおられ、短い間でしたが、とても良い友好関係を築いたと言えます。将来、このプログラム参加者の方々が、世界をより良くするためにご活躍されることを心より願っております。私はこの訪問に参加した方々の将来のビジョンや溢れんばかりのエネルギーに深い尊敬の意を表するとともに今回このような形でプログラム参加に携わることが出来て、非常に光栄でした。”（FAO：Dr. Iean Russell）

実施状況

11 月 19 日（月）現地プログラム 2 日目、FAO カンボジア事務局プロジェクト・マネージャーのイアン・ラッセル博士が率いるプロジェクトチームの案内の元、カンボジア北部 Chheur Teal Chrum 村を訪れました。農村地域での農業組合の取り組み、活動状況について 6 名の農協運営メンバーからお話を伺いました。

ブリーフィング内容：６名の農協運営メンバーとの対談

農協の主な取り組みは、農協に所属する個人農家に対して金利一律 2%の融資を実施することである。それらの融資により個人農家は農業に必要な機械や肥料などを妥当な値で購入することが可能になる。一般的なカンボジア企業からの融資は非常に高い金利がつくことから、個人農業者に特化した資金面での援助をすることで、農家の負担を低減し、農業全体の発展へと結びつけることがねらいである。

本農協では、融資以外にも非営利団体との連携による農家のための農業トレーニングや運営・管理に関する講座を実施。現在 300 名以上の農協メンバーが所属し、これらの取り組みは農村地域の組織能力を強化する代表的な取り組みとなっている。しかし、融資資金の大部分が非営利団体の資金援助で成り立つことから今後は持続的な農協の発展が必要とされている。

今回イアンさんと共に私達の現地訪問をサポートしていただいた FAO カンボジア事務局現地職員のチャンタンさん。この農協でのブリーフィングもそうでしたが、現地での会話通訳をしていただきました。彼なしには本プログラムでの出来事は語りきれません！
Chanthan-san, awkunh ch'ran！

CSP 参加者の感想：桑田 恵理華さん

農協の取り組みを通して、農作業において目に見えて成果が上がるようになり、それが大きなモチベーションになっているという声が非常に印象的でした。かつてはやみくもになりがちであった作業に目的意識が芽生え、作業自体にも楽しみを見出せるようになったと話して下さった方々の生き生きとした姿が何よりもそのモチベーションの高さを物語っていました。農協が取り組みを行うことで、農業を中心とする農村地を活気付けていることを肌で感じました。また、現場の声に真摯に耳を傾けることの重要性を痛感しました。現場の生の声は文章に表現しにくかったり、抜け落ちてしまったりしやすい分、現地で人々の様子に目を配ることが取り組みの成功に繋がると思いました。

“皆さんがカンボジアを訪問されたことは、未だに鮮明に記憶に残っています。皆さんはカンボジアのような紛争直後の国がどのようなものであるか、またその国での生活を向上させるためになされるべき優先事項は何であるのかを自身の目で確かめるためにカンボジアに来られました。私や他の FAO 職員にとってそのような皆さんの手伝いをすることは特別なことでした。また、この国で農業開発を通して生活改善に貢献している FAO のような開発団体のその重要な役目を確かめていただけたことも嬉しく思っています。皆さんの訪問は日本とカンボジアの互いの生活様式への理解を深めさせ、またその間に良い関係性を示したと思います。“(FAO Siem Reap：Mr. Chen Chanthan)

第５項　カンボジア特別法廷と国際刑事裁判について（UNAKRT 捜査判 事部分析ユニット長：藤原 広人さん、UNAKRT 広報官：前田 優子さん）

実施状況

現地プログラム 5 日目の 11 月 22 日（木）13 時 30 分～15 時、カンボジア特別法廷（Extraordinary Chambers in the Courts of Cambodia：ECCC）にて裁判所の運営に携わっておられる藤原広人さん、前田優子さんによるブリーフィングが行われました。ECCC は、クメール・ルージュ政権下の重大な人道的違反行為を裁くことで国内の和平を実現することを目的に設置されました。このブリーフィングでは、ECCC の活動や国際刑事裁判の仕組みを学びました。

ブリーフィング内容：藤原 広人さん、前田 優子さんの発表

- **ECCC について**

ECCC は、1997 年にカンボジアの首相が国連に助けを求めたのがきっかけで交渉が始まり、2003 年に合意があったが、実際に運営が始まったのは 2007 年である。裁かれる対象は、1975 年～1979 年のポル・ポト政権下の事件に限定され、また対象者はポル・ポト政権の最高幹部や責任の重い者のみで、外国人は対象外である。カンボジア国内法と国際法の両方が適用。最高刑はカンボジアの法に則り終身刑となる。フランスの民事法を取り入れているので、付帯私訴の制度がある。

刑事裁判で有罪となった場合、民事裁判で補償請求ができるが、補償の範囲は、公共に帰するものに限られる。犠牲者が民事当事者として参加できる点が特徴。第二ケースでは 4,000 人が参加し、それ以外に 4,000 人が情報提供者として参加した。一般人の関心も高く、2007 年から現在に至るまで、法廷を訪れた人は 17 万人に上る。ECCC に対する国民の関心を高めるため、近年では、カンボジア人を対象にしたスタディツアーや出張によるプレゼンテーション、ビデオ上映等の広報活動が積極的に展開されている。事件から 35 年が経ち、ようやく人々が事件について話し始め、高校や大学の授業で取り入れられたことは一つの成果とされている。

- **国際刑事裁判について**

戦争犯罪の証拠の収集には、実際に虐殺の墓地を訪れ、調査用の棒を地面に刺し、そこで収集した土の色や臭いを手掛かりに死体の状況を調べるといった方法がある。国際刑事裁判には多様な専門家が携わっている。ECCC での例を挙げると、軍事専門家、心理学者、歴史学者、地域学者など。国際犯罪と通常の国内犯罪との違いとしては、被害規模の大きさ、指揮命令系統の存在、犯罪動機、可罰的違法性といった点が挙げられる。加害者と被害者が混在していることが課題として残されている。

CSP 参加者の感想：大橋さん

ECCC では、法廷と傍聴席が分厚いガラスで区切られていたのが印象的だった。傍聴人が被告人に対して、銃撃や投石等の手段により報復することを防ぐための措置ではないかと思われる。内戦下での犯罪を裁くという ECCC の特質を物語っているように感じた。

また、ECCC の裁判官や検察官に、日本人が 1 人もいなかったことは驚きであった。ECCC の財源の 41%は、日本の出資金により賄われている。このように、日本は ECCC に対し、金銭面では多大な貢献をしているが、人材面では十分な貢献ができているとは言い難い。個人的には、日本には、ECCC の活動に貢献することができるだけの能力を持った法曹が多くいると感じている。それにもかかわらず、日本から ECCC に対して十分に人材を送り込むことができていない現状を、非常に歯痒く思った。

（2013/4/30 補足）現在 ECCC に日本人判事の方は勤務されておられませんが、2006 年 7 月から 2012 年 7 月の間に ECCC 最高裁判部で日本人判事の野口元郎さんがご活躍されておられ、第 1 ケースの最終判決（有罪確定、無期懲役に延長）では多大な貢献をされました。

ECCC 内に入る際、セキュリティ・チェックが 2 度行われ、かつ持ち込み可能なものが「身分証明と筆記用具」のみと非常に厳しい警備体制が敷かれておりました。裁判にはパソコンや大型ディスプレイなどテクノロジー機器が多く導入されており、とても近代的な印象を受けました。

第６項　警察訓練支援の人身取引取り締まり強化プロジェクトについて：カンボジア内務省長官兼 LEAP プロジェクト議長：Prum Sokha 内務省長官）

実施状況

現地プログラム 6 日目の 11 月 23 日（金）午前 9 時～10 時、カンボジア内務省にてソカー内務省長官によるブリーフィングが行われました。ソカー閣下は人身売買の取り締まりを強化するために警察の人材育成を行っている警察訓練支援（Law Enforcement Advancing Protection of children and vulnerable person：LEAP）プロジェクトに携わっておられ、当プロジェクトについての説明を受けました。人身売買等の犯罪に対して政府の行っている取り組みを学びました。

ブリーフィング内容：プルム・ソカー内務省長官の発表

1960 年代から 1990 年代にかけて行われた内戦ではソカー閣下が「国のすべてを壊し、それは今でもいろんな所に残っている」というように大きな傷跡をカンボジアに残しました。建物のみならずカンボジア国民にも大きな心の傷を作り、ソカー閣下はだからこそカンボジアのあらゆる所から多くの事を学んでほしいと望んでいました。閣下自身は大人になってから英語を学ぶなど勉学に対する熱意がとてもあり、資源が乏しいカンボジアは今後人材育成が重要になってくるだろうと考えています。

LEAP プロジェクトでは人身売買の取り締まりを強化するために警察の人材育成を行っています。この様な犯罪が罪であるという事を国民に周知する必要性を指摘し、これら人権問題に対して法整備が必要であると強く主張していました。LEAP プロジェクトの前身には UNICEF を始めとする国際機関の協力があった LEASETC プロジェクトがあり、継続的な取り組みの結果良い効果をもたらしているとのことでした。

内戦時にはほとんど断絶していた他国との関係も現在では改善すると同時に技術等も流入し国内の近代化が進んでいる一方で、人権問題を抱えています。家庭内暴力や人身売買は今もなお問題となっており、今後は教育の整備、警察による治安維持を国際機関と共に行っていきたいと述べていました。

ブリーフィング後、訪問した CSP 参加者一人一人に声を掛けるソカー内務省長官の様子。とても気さくな方でした。

CSP 参加者の感想：亀山 菜々子さん

どーん！ と構えた内務省の王宮のような建物を目にし、その豪勢さに違和感がなかったといえば嘘になる。しかし現れた閣下は写真の通り穏やかな表情で、彼の口からは、その苦労話から導かれる彼の信念・価値観・国への想いが熱く語られた。教育、健康。私が常日頃感じていること思い返してもどれも深く共感ができる。国というものはこの社会に生きる個人がよりよく暮らしていくための機能だ（と思う）。その機能はこの国ではまだまだこれから。社会保険も教育もこれからだ。

しかし、過去の遺産を誰の責任かと問うても前には何も進まない。「やるしかない。ならば自分がそれを導こう」そんな覚悟を彼の一言一言がひしひしと感じさせた。そしてまた、人の重要さを改めて感じた。教養・誠実さを兼ね備えた個人が結局はすべての骨格になる。溢れるこの国のエネルギーを導き個人の生活がより改善されることを願う。

実施状況

現地プログラム 6 日目の 11 月 23 日（金）11 時～12 時、JMAS オフィス内にて日本地雷処理を支援する会（Japan Mine Action Service：JMAS）カンボジア事務所の渕上さんからブリーフィングを受けました。JMAS は、認定特定非営利活動法人としてカンボジア、ラオス、アフガニスタン、アンゴラにおいて地雷・不発弾処理活動を実施しています。本ブリーフィングを通して、JMAS の取り組みや変わりつつあるカンボジアにおける地雷問題を学びました。

ブリーフィング内容：渕上 浩美さんの発表

地雷埋設の記録がないため、位置は関係者からの情報、被害者情報、実地踏査から特定する調査によると、地雷は 400～600 万個、不発弾は 270 万個以上が残されている。1979 年から 2010 年までの被害者数は 63, 800 人に上る。2005 年～2006 年にかけて被害者数が大幅に減少したのは、日本の技術提供、啓発活動及び、作業のスピードアップなどが要因である。地雷・不発弾汚染の影響としては、農地の減少・未活用や、生活インフラの未整備、地域開発等、民間投資の停滞といった問題が挙げられる。

JMAS は 2002 年に NPO 法人として、元自衛官が中心となりカンボジアで処理活動を始めた。2006 年からは、地域住民を雇用し、訓練した上で除去活動に参加させる住民参加型プロジェクトを開始した。狙いは処理跡地利用による農業振興と企業誘致。処理後、実際に日本企業 4 社の誘致に成功した。今後の課題は、CMAA の自立処理能力の向上と技術移転の推進と企業・NGO との連携を強化である。また、2019 年目標として、2019 年の段階で被害者を 100 名以下にし、地雷・不発弾の危険を最小限とすることを掲げている。処理は手段であって、目的はその後の社会的・経済的発展である。日本は 92 年から処理支援を開始しており、支援総額は 120 億円以上に上る。地雷・不発弾処理における問題点として、予算の 9 割を国際支援に依存していることや、一体的な処理計画の欠如、処理担当者のモチベーションの低調がある。

CSP 参加者の感想：石井 はるかさん

私は現在カンボジアに住んでおりますが、8 年前に最初にカンボジアを訪れた頃に比べて地雷警告の看板を見かけることも非常に少なくなり、被害者数が減少していることなどから状況が改善されたような漠然としたイメージをもっておりました。また、地雷は私の職務において扱うことがなく非常に専門的な分野だと思っておりましたが、カンボジアの発展に伴い起こるようになった地雷の問題や処理後の土地活用、住民参加型プロジェクトの話などは私の扱っている分野との共通点もあり、開発に絡めてお話しいただいたブリーフィングは私にとりまして非常に有意義なものでした。

“2012 年 1 月に着任しブリーフィングをさせていたいただく度に、カンボジアの地雷や不発弾だけでなく、JMAS カンボジアの処理活動やインフラ整備についてどのように的確にお伝えすればよいのかと考えさせられます。今回は限られた時間中、参加者のバックグラウンドを考慮し、自分の経験を踏まえてお話しさせていただきました。質疑応答では他の訪問者と異なり、マクロ的な質問が多く、既に各専門分野を持ちつつも、世界の動きを敏感にキャッチされているのが印象的でした。皆様のご訪問を受け、私自身、大変勉強になりました。これを機に情報交換をさせていただければと存じます。“（JMAS：渕上浩美さん）

第８項　クメール・ルージュ政権下のジェンダーに基づく暴力被害者を対象としたプロジェクトについて（CDP コーディネーター：Savorn Duong さん）

実施状況

現地プログラム 6 日目の 11 月 23 日（金）14 時、プノンペン市内の Baitong Restaurant にてカンボジア・ディフェンダー・プロジェクト（Cambodian Defenders Project：CDP）についての理解を深めるべくブリーフィングが行われました。CDP コーディネーターのサヴォーン・ドンさんを講師に迎え、クメール・ルージュのもとで行われた残虐な暴行の被害者のケアをいかに進めるべきか、またこの事実を風化させないためにすべきことは何かについて話し合いました。

ブリーフィング内容：Savorn Duong さんの発表

CDP の概要の説明として「ジェンダーに基づく暴力」（Gender Based Violence：GBV）についてのプロジェクトやその活動についてご教授いただき、被害者に対しての法的、また精神的サポートからアウトリーチの方法まで理解を深めることができました。その中で 2006 年までクメールルージュ内での GBV が疑われなかった理由としての「モラル・オフェンス（Moral Offence）」の存在について学びました。モラル・オフェンスとはクメールルージュ内で取り決められた男女の接触を徹底的に廃するという一つのルールです。この存在よりクメールルージュ期の GBV が組織的犯行であるという裏付けを得ることが難しくなっています。

CDP の大きなねらいはクメール・ルージュ下での被害者を支援し、またその問題に対しての人々の意識を高めることであり、その際また被害者の意見を尊重することが必要不可欠です。また、審議についてはまだ見通しが立っていないがしっかりコミットしていくこと、そして援助を募る方法としては出版物などの広報活動、男性に向けたフォーラムの開催を挙げられました。

“私は、GBV プロジェクトのコーディネーターとして直接被害者からお話を伺い、学生さん達やラジオにて GBV の問題意識高める普及・啓発活動を行っております。GBV の被害者は身体的・精神的にもケアを必要としますが、その上で大事なことは互いの信頼を築き上げることです。そのためにも様々な機関と協力し、幅広い活動が行えるよう今後とも被害者になられた方々と共に普及・啓発活動を取り組んでいく所存でおります。本ブリーフィングにて GBV プロジェクトに関する問題を少しでも理解いただければ幸いです。”
(CDP：Mr. Savorn Duong)

CSP 参加者の感想：池田 孝志さん

このブリーフィングで、最も印象に残ったことが、1 つのパンフレットを見たことです。その中には、過去、男性が女性を性奴隷のように扱った、残酷なイメージ写真が掲載してありました。そのイメージ図見た途端、そのページを閉じたほど、あまりにも辛辣なものだったことを今でも覚えています。“男性と女性”、本当は、お互いに存在するからこそ、お互いが生きることが出来る。だからこそ、理解し合い、尊敬し合い、想い合うべきだと思います。

しかし、クメール政権下にあった時、カンボジア女性たちは女性であるがために、心に癒すことのできない傷を、こんなにもというほど背負わせられました。性別、国籍、文化、肌の色の違いを超えて、想い合えるのが、わたし人間だと思います。また、遠い距離で離れた人と、会ったことのない人とでも、わたしたちは想うことで、こころ同士で繋がることができます。だから、人のこころの痛みを自分の痛みに感じられるのだと思います。わたしたちは直接、このような残酷な経験を体験したわけではありません。また、被害にあった方々にすら会ったこともありません。しかし、人間の心を持ったわたしたちは、このことについて、何かを感じることができるのではないでしょうか。

第３節　　見学・ツアー

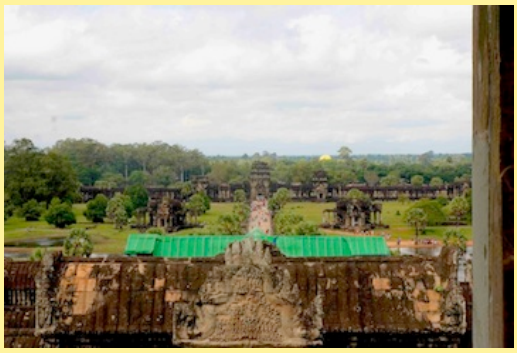
第１項　世界遺産アンコール・ワット・バイヨン２時間遺跡巡りツアー（JASA 広報担当：吉川 舞さん）

ツアー地のバックグラウンド

現地プログラム１日目の 11 月 18 日（日）午前中、カンボジア北西部に位置する世界文化遺産・アンコール遺跡群を訪問しました。日本政府アンコール遺跡救済チーム（Japan-Apsara Safeguarding Angkor：JASA）で広報を担当されている吉川舞さんに遺跡を案内していただき、遺跡群の中でも特にクメール王朝時代の魅力的な彫刻が残るアンコール・ワット、バイヨンの壁画が示す意味やストーリーについて吉川さんに解説いただきました。

CSP 参加者感想①：吉村 美紀さん

アンコール・ワットという世界的にも有名な遺跡をまわる上で、最も重要な役割を果たして下さったのがガイドの吉川舞さんでした。日本国政府アンコール遺跡救済チームの広報を担当しながら、ずば抜けた知識と天性の話術で遺跡のロマンを熱く語ってくださる舞さんのお陰で、アンコール・ワットの遺跡を普通の何十倍も楽しむことができました。深い森の中に佇むアンコール遺跡は、各国の修復チームの手によって大切に守られながら何を語るわけではありませんが、舞さんによって語られる数々の物語のおかげで、一つ一つのモチーフがまるで生きているかのような臨場感を持って伝わって来ました。



CSP 参加者感想②：中原 隆伸さん

今まで日本政府による政府支援の実施に関わったことがあるのですが、文化遺跡の修復という形の支援は聞いたことこそあれ実例を見たことがありませんでした。バイヨンで行われている日本政府の修復プロジェクトを見て、一口に政府支援といってもいろいろな支援の形があるのを再確認でき、非常に印象に残っています。また、吉川さんが壁画の意味や床に空いている穴の意味など、まるで某テレビ番組のミステリーハンターさながらに説明していただき、非常に楽しんで参加できました。他の遺跡を訪問した時もそうでしたが、エンターテイメントと教養を兼ね備えたまさにプロフェッショナルという説明をして下さり、大変素晴らしかったです。

“カンボジアの文化遺産として最も有名なアンコール・ワット。寺院の壁面に 100 以上の巨大な顔を持つバイヨン。9 世紀から 15 世紀に栄えたアンコール王朝が建立した数々の寺院は、その昔東南アジアを席巻した王国の力強さと文化水準の高さを今に伝えてくれます。未だ多くが謎に包まれているアンコールの歴史や寺院群を丁寧に研究し、王たちの実像や当時の社会の様子、その間にある歴史のうねりを、国内外に広く伝えていくことが求められています。多くの人々に伝えていく中で生まれる理解や共感は、近代になって度重なる苦しい時代を超えてきたカンボジアの足元を照らす光になることと思っています。”（JASA：吉川舞さん）

見学地のバックグラウンド

現地プログラム 2 日目の 11 月 19 日（月）10 時頃、カンボジア北西部に位置するウドンメンチェイ州のタ・モク博物館を訪問しました。ポル・ポト派最高幹部の一人であったタ・モク将軍が 1979 年のクメール・ルージュ崩壊後から 1993 年の逮捕までどのように北部地域を支配及びコントロールしていたか、イアン博士らの案内のもと、元クメール・ルージュ軍兵士であった方から当時の様子、タ・モク将軍の人柄についてのお話を伺いました。

CSP 参加者感想①：田中 陽一朗さん

タ・モク将軍の施設で元クメールルージュ（KR）兵の人からお話を伺い、自分が考えていた KR という組織は本当に一部だったと感じました。なぜなら、渡航するまでは KR はジェノサイド等を行った非人道的な組織だと考えていたからです。もちろんポルポト派を良く書いたジャーナリストの本『わたしが見たポルポト』等を読んで、ポルポトが一部の人からは慕われていたことは知っていましたが、作者の心境があまり理解できませんでした。しかし、王のために兵士になったという話や KR の生活は良かったという話などを聞いて、KR の人々及びその周辺で暮らしていた人々の一部は慕っていたということを理解できるようになりました。ただ、ジェノサイドがあったことは事実であり、KR を慕っていた人々と被害を受けた人々の間でお互いを理解し、平和な社会を築くためには想像以上に複雑だと感じました。

CSP 参加者感想②：藤田 綾さん

タ・モク将軍が、クメール・ルージュ（KR）の元参謀長官であったという歴史的事実しか知らなかったけれど、彼に仕えた兵士、つまり KR の当事者側から直接説明を伺ったことで、彼の性格やアンロンベン地域の発展への貢献を新たに知って意外性に驚いた。例えば、王への忠誠心から軍に入隊し、自身が片足に障害を抱えていたこともあり、差別をしない人格であったこと。輸入品よりも新鮮な食料を好んだため、兵士を動員してこの地域の多様な農業の整備や水利整備に尽力したこと。KR の犯した人道的な罪は重大でその裏側は評価されにくいからこそ一次資料は貴重であって、双方向あるいは多角的に評価をしていかなければならないと思った。

見学地のバックグラウンド

現地プログラム 3 日目の 11 月 20 日（火）午前中、カンボジア北部に位置する Krabau 村をイアン博士らの案内のもと訪問しました。2011 年欧州食料安全に関するプログラムの一環として、国が所有する池に食用の川魚約 150 匹を放ち、魚の品種保護を進める試験的プロジェクトを実施しているとのお話を伺いました。首都プノンペンに通ずる一般道路のすぐ脇に 50 平方メートルプール程の大きさの池にて実施されており、品種保護と持続的発展双方を導く手法として今後の成果が期待されているとのことでした。

CSP 参加者感想①：田中 陽一朗さん

今回保護池での説明を伺って、実際の国際連合食糧農業機関（Food and Agriculture Organization：FAO）のフィールド活動がどういったものか、またその時の方法として、地元の住民を巻き込んだ組織作りが大切だと強く感じました。例えば、今回の訪問地のお話では、池を保護するために村の人たちとこの場所では魚を獲らないというルールを作ったり、当番を決めてきれいにしたりする等、地域の人々と一緒になってプロジェクトを進めていくことがよく分かりました。実際に現場を見ることで、勉強会やタイでのブリーフィングで学んだボトムアップ型の政策、持続可能な開発の大切さを実感することができ、今後も開発の勉強をする上で、より具体的に考え、開発に関する見識を深めていきたいと思いました。

CSP 参加者感想②：桑田 恵理華さん

農作物と比べて、魚は自由自在に移動したり、魚が水中にいることから一目で見渡すことが難しかったりする分、挑戦的なプロジェクトだと感じました。しかしながら、農村での昼食では魚が振る舞われ、農村の人々と参加者も一緒にご馳走になる中で、このプロジェクトの必要性を強く感じました。地域住民も一体となって保護池の管理に関わることで、魚が無断で収穫されることを防ぎ、より継続性がある事業へと展開することができる仕組みが印象的でした。農村の人々の繋がりが強いからこその地域性を生かした仕組みだと感じました。スーパーに当たり前に並んでいる魚が当たり前ではないことを改めて考え直すきっかけになりました。

第４項　かものはしプロジェクトのコミュニティーファクトリー支援活動の見学（かものはしプロジェクト現地駐在員：亀山 菜々子さん）

見学地のバックグラウンド

現地プログラム４日目の 11 月 21 日（水）午前９時頃、シェムリアップのソトニコム地区に位置するコミュニティーファクトリーを全員で訪問しました。このファクトリーは NGO 団体かものはしプロジェクトにより運営されており、かものはしプロジェクトの駐在員でおられる亀山菜々子さんにご案内いただきました。い草を使用した製品作りの過程を見学し、このファクトリーの運営がいかに地元の女性の権利向上に寄与しているかを学びました。

CSP 参加者感想①：井上 良子さん

実は今回が２回目の見学だったコミュニティーファクトリー。貧困層家庭の女性に職業訓練とハンディクラフト製品をつくる雇用の機会を提供するこのプロジェクトの見学では、「自立」「自主性」の重要性について考えさせられた。まず印象的なのは、い草を（１）染める（２）織る（３）カットする（４）縫製する各工程で真剣に、そして楽しそうに働く女性たちの生き生きとした姿。それぞれの工程でのチームワークや自主的なリーダーシップに任せられ、一方的に決められた枠組みや仕組みを提供するだけでない、自発的な組織化が目指されていることがわかる。

また、前回訪問した際にはなかった、製品を販売するお店がファクトリー内にできたことで、自然と作り手たちのモチベーションにつながっていると感じた。一定の収入が入ることによる経済的な自立の他、識字教室や生活全般の指導など、自立的に生きていくための力をつけることが一過性でない持続的な底上げになっていると思う。

CSP 参加者感想②：窪 健志さん

大学で社会起業なるものを学ぶなかで、はじめて覚えた組織がこのかものはしだった。せっかくなので共同代表の方に聞いてみた。「社会起業とよばれることをどう思われますか？」と。「自分たちはこの国の人身売買の問題をなんとかしたいというのが第一優先のミッション。だからそのアプローチの仕方にはこだわらない。」やっぱりソーシャルビジネスは目指す社会、そして世界に向けての手段と考えられる。実際にはその社会的活動とシビアなビジネスという、ともに難しい２つの要素の両立に対しての厳しさがあり、バスの中でほかの CSP 参加者とも議論もした。だが、はじめて海外におけるその現場を見てみて、現地の女性たちがせっせと、そして楽しそうに作業する姿、さらっとアツいことを話してくれるスタッフやインターンの学生さんたちと接して、お金やビジネスを手段と考えて行動することもやはりすてきだなと感じた。

“スオスダイ！ 私が工房につくや否や、みなさんもお会いしたあの笑顔が出迎えてくれます。家計のため、兄弟の教育費のため、ここに来る女性たち。その他愛無い笑顔ひとつひとつにはそれぞれのストーリーが刻まれています。彼女たちは決して楽とはいえない生活環境でありながら人への優しさを忘れません。生きる力の訓練をしています、と説明しながらも、生きる力なんぞ私の何倍も持ち得ている！ と思わせるたくましさを備えています。でもいつも思うことは、彼女たちは時に非常に脆弱であると共に、非常に大きな可能性を持ち得ていることです。―もし学校に行けていたら、もしお母さんが病気の時にきちんとお金が払えていたら―目の前の現実に、もしという言葉は無力ですが、いかにここから彼女たちの可能性を広げるお手伝いができるか重要だと考えています。ここに出会えた縁を大切に、スタッフと女性たちと一緒に日々進んでいきたいです。”

（かものはしプロジェクト駐在員：亀山 菜々子さん）

ツアー地のバックグラウンド

現地プログラム 4 日目の 11 月 21 日（水）正午、コンポントンのプラサトサンボー地区に位置する遺跡、サンボー・プレイ・クックを訪問しました。JASA で広報を担当されておられる吉川舞さんにご案内していただき、アンコールワットよりも更に長い歴史を持つこの遺跡を深く知ることが出来ました。改めてカンボジアの魅力に触れ、また、この遺跡によってもたらされている周辺地域への効果を実際に目にすることで、観光による開発の可能性を強く感じました。

CSP 参加者感想①：清 衣里奈さん

吉川さんの説明のお陰もあるだろうが、既に世界遺産に登録されているアンコール遺跡に引けをとらないおもしろい遺跡だと素人ながらに感じた。観光客は私達以外にはほとんどいなかった。世界遺産に登録されれば観光客も増え、周辺の環境は良くも悪くも変化し得るのだろう。あののんびりとした穏やかな空間は変わってほしくないと感じたのは先進国の人間のエゴなのだろうか。また、遺跡周辺でスカーフを売る子どもたちが強く印象に残った。バスから降りると素敵な笑顔で「こんにちは！」と挨拶してくれた子どもたち。その歓迎に素直に喜べたのは一瞬で、すぐに”one dollar, one dollar”とスカーフを売ろうとするのを見て複雑な気持ちになったのは私だけではなかったのではないか。

CSP 参加者感想②：村重 茜さん

カンボジア滞在中に日本とはどこか違う、ゆったりとした時の流れを何度も感じる場面がありました。特にこの遺跡は周りに建物がほとんどないひっそりとした場所にあり、その印象を強く感じました。中でも、空中宮殿やドルゥガーの像などその精密さと美しさにはびっくりしました。現在は修復作業も行われていて、作業過程や今後この遺跡が観光地化していくのかなども気になりました。ただ、一番忘れられないのは物売りの子どもがたくさんいた事です。国際協力に関心がありながらも結局は「観光客」にすぎないと、強く実感しました。どうすることが子ども達にとって一番良かったのか未だによく分かりません。

“アンコール遺跡群に先立つこと 500 年以上、6 から 8 世紀にかけて建立された王の都と王のための寺院が現在のサンボー・プレイ・クック遺跡群です。煉瓦で作られた 1300 年前の寺院群に残された様々な情報は、当時のこの地域にインドや中国、それより先の世界とも交流のある一大文明があったことを示しています。それらの寺院群は今、ひっそりと森の中に佇み、遺跡の周囲に住む人々と共に時間を重ねています。地域にしっかりと根を下ろした森と周囲の村の人々の営みと遺跡のつながりを通して、内戦や貧困という一般的なイメージの向こう側にあるカンボジアの姿を体感できる、それがこの場所の最大の魅力だといえるのではないでしょうか。”（JASA：吉川舞さん）

見学地のバックグラウンド

現地プログラム最終日の 11 月 24 日（土）午前 10 時頃、プノンペンから北西に向けて 15 キロほど進んだチュンエク村にあるキリングフィールドを訪れました。この訪問の後に訪れるトゥール・スレン強制収容所から連行され処刑された人が埋められた場であり、オーディオプレイヤーによる詳しい説明を聞きながらまわりました。時間内ですべてを聞いてまわることが出来ない程大勢の人々が残虐な形で命を奪われた事実を認識し、犠牲になった人々の冥福を祈りました。

CSP 参加者感想①：岡見 有純さん

一番強く感じたのは、人の命の尊さです。数多くの殺害の様子を見聞きし、月並みですが惨劇を繰り返してはならないと感じました。殺害の様子はあまりに怖かったことを帰国した今でも覚えています。被害者の恐怖や加害者の心理状態の中には死への恐怖やマインドコントロールへの恐怖がありました。カンボジアの人々の照れたような笑顔と人の笑顔が他人の幸せを創ることを思い出し、そんな恐怖の中誰も死んでほしくないと感じ続けていたいと思います。また、自由な心を持ちたいと感じました。どんな時どんな考えもそれを見つめる個人がその行動を決められます。大切な人のために生き残る必要はありますが、その人の笑顔を守るためにも生き方を選び強くありたいと考えました。

CSP 参加者感想②：五百蔵 綾子さん

これが 3 度目の訪問となる。学生時代、震災や紛争後傷跡の残る地域を訪れ、平和な社会に貢献できる人になりたいと漠然と想った。大学卒業後、その第一歩として進んだ国際ビジネスの分野で経験を重ね邁進していたが閉塞感を感じていた。そんな頃に初めてカンボジアを訪れた。泥濘でこぼこ道を中心街から一時間半かけ、キリング・フィールドに着いた。ポルポト政権下の大虐殺を「歴史上の事実」という認識から「現実」として受け止め、今後の自分の生き方をさえも見つめなおす機会となった。そんな特別な場所に、8 年後の 2012 年、偶然が重なり国連インターン、また CSP 参加者として戻った。紛争後の平和構築における国際社会の在り方について考えている。

見学地のバックグラウンド

現地プログラム最終日の 11 月 24 日（土）午後 11 時頃、ワットプノンにあるトゥール・スレン虐殺博物館（Tuol Sleng Genocide Museum）を訪れました。ここではクメールルージュ時代、知識人と見なされた人そしてその家族が収容され、のべ 15,000 人から 20,000 人が亡くなったとされています。生還できた人数はたったの 8 人であり、敷地内には看守による残虐な行為の爪痕が今でも残されています。この収容所は当時暗号名として S21 とも呼ばれており、犠牲者の顔写真なども展示されてありました。

CSP 参加者感想①：奥田さん

私たちが 11 月 24 日に訪れたトゥール・スレン虐殺博物館は、かつて高校の校舎だったそうです。ここで、わずか 2 年 9 ヶ月の間に、ポル･ポト政権下で反革命分子とみなされた知識人や技術者、農民など延べ 2 万人が収容され、拷問の末虐殺されました。私自身、今回のプログラムで初めてカンボジアに訪れましたが、カンボジア人の人々と出会ってみると、皆やさしい笑顔を持った人々という印象を受け、とてもこの地で２０世紀最悪と言われるような大虐殺が起きたのだとは信じられませんでした。

しかし、今回この虐殺博物館を訪れると、被害者の写真や衣服、拷問に使用された道具など、当時の虐殺の風景が蘇るような生々しい展示がされており、ここで虐殺が実際に起きたのだということを改めて知らされました。インドシナの平和とうたわれたこの国で、このような虐殺を起こすほどのイデオロギーの持つ力とは何なのか、考えさせられました。

CSP 参加者感想②：藤居 由依さん

「なぜカンボジア人はカンボジア人を殺さなければならなかったのでしょうか？」現地ガイドをしてくださった方の訴えかけるようなこの問い掛けが今でも私の頭にこびりついています。経済発展の上昇気流に沸く熱気あるプノンペンでも、この場所は静かに、しかし切実に命の尊さについて人々の胸に語りかけています。カンボジアの黒い過去を「異国の地のもの」だとか「過ぎ去っていったもの」だとかでは終わらせない力がこの博物館にはありました。ここまで残虐な行為に至らしめる魔物のような物が誰の心にも宿る可能性があり、私たちはその可能性をしっかり見つめて自身を世界情勢や国の政治で流されることのないように努める義務があると強く感じました。

第４節　　経験・交流

第１項　アンロンベン地区における小学校の訪問（小学校の生徒約 30 人との交流）

現地での参加状況

現地プログラム 2 日目の 11 月 19 日（月）9：30～11：00、カンボジア北部に位置する Santepheap 村（アンロンベン地区）において小学校の生徒約 30 名と縄跳びやシャボン玉、折り紙などの方法で交流を行いました。小学校の生徒との交流を通じて、現地の農村における初等教育の状況を学びました。

CSP 参加者の感想①：瀧澤 菜美子さん

赤土の道の小さな村の小学校で、中庭での授業におじゃましました。挨拶の後、見本に皆で長縄を跳んでみせながら、年齢よりかなり幼く見える白いシャツ姿の子どもたちを見ると、少々戸惑った様子。クメール語の問いかけに笑い、ほぐれるのを見て、挨拶だけでなくもっと言葉を覚えてくればよかったと切に思いました。少しでも関わりたくて子どもたちを長縄に誘いました。二人の女の子の手を引き一緒に跳ぶと、初めてのことに尻込みしていた子の顔に笑みが浮かび、傍で見ている子どもたちからも笑い声が起きてとても嬉しかった！

順に一緒に跳ぶうち、呆然や驚きの雰囲気から、照れや笑いの表情へと変わり、非日常である我々の訪問を迎えてくれました。一緒に動くことで気持ちも近づく。寄り添えば応えてくれる。人は、生きる環境の中、周囲の人々との関係の中で育っていくことを再確認しました。率直な反応が多くの示唆を与えてくれた貴重な訪問でした。帰り道現地コーディネーターの方に伺うと、入学料は米 5 ドル、退学後も復学可能、就学率は高いが全員ではないとのこと。様々な状況の子どもたちが共生し、育ち合い、それを見守る村のあり方が印象的でした。

CSP 参加者の感想②：池田 孝志さん

もちろんこの小学校への訪問という経験を通しても、感じたことがたくさんあります。まず初めに、人としてのこころです。大きくなるにつれて、私たちは、知識や経験に雁字搦めにされて、人間として忘れてはいけない大切な“心”を忘れがちになると思います。でも、素直に自分の心を表現しているカンボジアの子どもたちを見て、もっと私たち人間一人ひとりは自分のこころと感性を大切にしていくべきだと感じました。頭ばかりで考えてしまうために、何かを犠牲にしていると感じました。わたしたちのこころが訴える言葉を大切にしていくべきではないでしょうか。

また、教育に対する考え方にも影響を受けました。僕の将来の一つの目標として教育者になり、世界平和へ貢献することがあります。前述したように、この訪問を通して、子どもたちの感性にとても刺激を受けました。そのため、将来教育者として生きていく上で、一人ひとりの大きな可能性を秘めた感性を大切にしていきたいと思いました。また、いろんな意味で、常に同じ位置からの視線をもって、そばに寄り添っていく姿勢、それこそが、教育があるべき本当の姿ではないのかと感じました。

第２項　　アンロンベン地区における稲刈り体験（村長の家で農村の人々約 30 名）

現地での参加状況

現地プログラム 2 日目の 11 月 19 日（月）11：00～12：00、参加者は Santepheap 村（アンロンベン地区）の人々と共に農作物の収穫作業を行いました。農作物を実際に収穫する作業を通じ、現地での農業や生活、農協が農村においてどのような役割について学びました。

CSP 参加者の感想①：木曽 美由紀さん

アンロンベンでの稲刈り体験はとても貴重なものでした。稲刈りは私にとって初めてでとても新鮮だったのですが、稲の育てられている場所に行くまでの道のりにも驚きました。カンボジアは平均気温が 28～29℃と高く、一年を通して暖かい気候です。灼熱の太陽が照りつける中、集落から歩いて比較的長い距離を移動し、草の茂る細い道を通りようやく辿り着く畑は到着するだけで運動不足なわたしには精一杯で、しかし農村に暮らす人々の生活のありのままを垣間見た気がしました。

稲刈りは鎌で稲穂の束を持って行います。汗でぐっしょりになりながらも、農村に戻るとむらの方々がココナッツのジュースとできたての食事を用意してくださっていて、疲れもふっとぶようでした。集落から畑への道中は FAO 現地職員の方々が彼らの活動のこと、農村のことなどを丁寧に説明してくださり、開発といえばインフラ整備と思っていた自分にとって、彼らの地域に根ざしたプロジェクトの話が聴くことができたのが印象的でした。

CSP 参加者の感想②：花村 百合恵さん

初めての稲刈り体験は新鮮で、とても楽しかったです。広大な畑を目の前に、いくら村全体で協力するとはいえ、全て手作業で行うのは大変な仕事だろうと思いました。けれども村の方々は明るい笑顔で教えてくれ、生きる力、強さ、温かさを感じました。また村には高床式の米蔵があり、湿気を防ぎ、米を長く保存できるそうで生活をしていく上での工夫が感じられました。

体験を通し、農業が村の方々の生活の基盤となっていると実感するとともに、人々の生活を支える農業への援助の重要性を感じました。また村の真ん中を走る道路は援助を受け平らに整備されたとのことで、開発が進むということは生活が改善され、便利になる点で必要な事だと思いました。しかし必ずしも一方向に開発が進むことが良いことではなく、その村の人々の生活や価値観、風習、幸せの形等を大切にした上での開発が今後も進んでいって欲しいと思いました。そのためには今回のような体験を通した村の方々との交流や対話から、人々の本音を聞くことが大切なのだと感じました。

現地での参加状況

現地プログラム 2 日目の 11 月 19 日（月）、カンボジア北部に位置する Krabau 村（クーレン地区）に農村宿泊を体験しました。参加者は 3 つのグループに分かれて村人の家にホームステイし、蚊帳やハンモックを使った村人と同様の方法で就寝しました。また、夜には村の人々と一緒に日本の歌やカンボジアの歌を歌いとても盛り上がりました。農村での宿泊を通じて、参加者たちはカンボジア農村地域に住む人々の暮らしを学びました。

CSP 参加者の感想①：藤居 由依さん

アンロンベンでの農村宿泊で私が感じたことは、カンボジアの人々の豊かさです。確かに道路は舗装されておらずでこぼこ道が続き、温かいシャワーもありません。しかし、カンボジアの人々の間には、「共生社会」がしっかりと形成されており、コミュニティーの皆で米作りをして、子育てもしていく、そんな生活の形に GDP などでは計れない豊かさの形を実感しました。そんな日本が失いつつある一つの理想の生活の形を大切にして欲しいと思う一方、農民の方々は戦後日本が経験したような発展を渇望しておられました。

そこでそのような地域にとって「発展」とはどのようになされるべきものだろうか、と考えさせられました。アンロンベンに来るまでは特に気付きもしなかったこの問題に直面し、現場を知ることの重要性を改めて感じました。見知らぬ外国人である私たちを快く受け入れ大切な田畑での農作物の収穫も体験させて下さり、そして精一杯のごちそうでもてなしをして下さったアンロンベンの方々の笑顔を私は一生忘れません。彼らの笑顔を守るために何が出来るのだろうか、今でも考え続けています。

CSP 参加者の感想②：吉村 美紀さん

アンロンベンでの農村宿泊体験は、FAO の方々の特別な計らいによるものでした。普段は外部からの訪問者などほとんどない村に、20 人以上の外国人を滞在させるのは容易なことではなかったはずです。宿泊は高床式の民家にゴザと蚊帳で寝るチームと、床下に蚊帳付きのハンモックを吊るして寝るチームとに分かれましたが、夜遅くまで村の若者と、ひとしきり歌ったり踊ったりの時間を過ごした後だったので、いつ眠りについたのかもわからないほどぐっすりと眠ってしまいました。

FAO のプロジェクトの一環として食品加工の訓練を受けた方々が丁寧に作ってくださった夕飯をお腹いっぱいに食べ、夜には特別醸造の椰子の実のお酒を呑み、電灯のない村で空いっぱいに広がった星を眺めて過ごした夜は、何事にも代えがたい思い出となりました。電気やガスなど、私たちにとっては当たり前のものが無い環境で、非常に豊かに過ごしている村人の暮らしぶりを見て、羨ましくなった人は少なくないのではないかと思いますが、実際にはいろんな苦労があるはずです。村の人々の生活が、少しでも楽になればいいなと心から願いながら、村をあとにしました。

現地での参加状況

現地プログラム 3 日目の 11 月 20 日（火）13：00～14：00、Kulen 地区に位置する現地の病院を訪問しました。センターでは、外来診療、手術、出産、搬送手当て、リプロダクティブ・ヘルスケア、マラリア、デング熱など感染症に関する研究を主な活動としていました。参加者は、病院に勤務する現地の医師と看護師の方からセンターの活動内容についてレクチャーを受け、センター内部を回り、実際にどのような医療が行われているのかを見学しました。

CSP 参加者の感想①：神田 恵梨さん

田園風景がひたすら広がるその中にひょこっと現れた街外れにある病院。門の入り口には「H」のマークで病院を示す標識があり、門をくぐると素朴な白い石造りの建物が 3 つ見えた。診察室と呼ばれる建物の中にはなんの仕切りもない部屋にいすが 2 つ置いてある。「え？これが診察室？」、、日本とは違いすぎるこの現実を目の当たりにして衝撃だった。そこは穏やかな時間が流れている程とても静かで、そこで出会った看護師さん、お医者さんは何一つ嫌な素振りを見せることなく私たちの質問に答えてくれた。現地医療のこと、費用のことたくさん質問が出た。

現地の医療と言っても設備や人材が十分でないことからこの病院で対応できる診察は簡易なものに限られているとのこと。緊急を要する事故や怪我の場合はここから 40 キロ程離れた街の大きな病院に搬送されるのが日常であるということ。私が住む日本の環境に当たり前にあるものがここにはなさすぎる現実を見て、日本に帰ってからはまず第一に「必要な物や環境が揃った中で生活できる」ことを実感し、感謝することになった。

CSP 参加者の感想②：花村 百合恵さん

私は日本で看護師をしておりますが、今回実際にフィールドを訪れる機会をいただき、まずは現地の状況を自分の目で見て確かめる事が大切だと感じました。それまでは自分が選んだ看護師という道をこのまま進んでいいものかと考えていました。しかし、実際にヘルスセンターを訪れた際、その状況に大きな衝撃を受けました。「何とかしなければ。」そんな思いが込み上がり、自分の感情の変化に驚くと共に選んだ道が間違いではなかったのだと確信しました。

また、一方で自分の思いを大切にしつつも、現地の人々の声を聞き、必要とされている変化を知ること、更に自分自身の知識、能力を広げる事の必要性も強く感じました。人々との対話の中からニーズを知り、「どんな変化が必要なのか」「それに対して自分は何ができるのか」「どんな力をつけなくてはならないのか」、そういった視点を持って考え、行動に移す事、それが重要なのではないかと思いました。現地で必要とされる変化や成すべき事は、人々の声や状況の中にヒントが見つかるのだと思います。まだまだ未熟ではあるものの、今後保健医療の分野で自分にできることを現地の人々に寄り添って探していけたらと思いました。

第５項　クーレン地区のフィールド・ファーマー・スクール訪問（フィールド・ファーマー・スクール実施者宅を訪問）

現地での参加状況

現地プログラム 3 日目の 11 月 20 日（火）10：00〜12：00、Kulen 地区 Kulen Chenung 村にあるフィールド・ファーマー・スクール（The Vegetable Farmer Field School）を訪問し、参加者は、このプロジェクトの目的や運営状況を伺いました。校内の農園を訪れ、どのような農業技術を使って作物が栽培されているのかを見学しました。本プロジェクトは、民家の敷地の一角にある畑を実践的な学校とし、農家を自立させ、持続可能な農業の仕組みを作ることを目的としていました。そのために、学校では、FAO 職員や農業の専門家が現地農家に対して、農業製品の生産における技術的サポートを行っていました。

CSP 参加者の感想①：窪 健志さん

MALIS プロジェクトの一環に属する自治体の方のお話を伺い、ファーマー・スクールを訪れた。日本における地域福祉の考え方は、国際協力のコミュニティに関する事業とリンクする部分が大きい。そう強く認識する機会であった。コミュニティを通しての自助努力、そのプロジェクトの作り方など、大学の地域福祉の授業でマッチし過ぎていて、帰国後とてもこの講義が面白くなった。

また、ファーマー・スクールでは晴天のもとで緑がきれいに映えるいろいろな農作物を見せていただいた。魚をあたえるのではなく、魚の釣り方を教える、とよく言われるように農業の技術を教える場。敷地もそんなに大きくなく、規模はめちゃめちゃ大きくはないが、そこで得た技術を生かすことで彼らの生活が向上していく、とても意味の大きい場所。その現場で、かじらせていただいた瓜？はとてもみずみずしく美味しかった。太陽の味がした。笑

CSP 参加者の感想②：瀧澤 菜美子さん

案内された敷地の入口付近にある、さほど広くないスペースには板の壁で仕切りがされており、天井にもしっかりネットがはってありました。中に入ると何種類かの作物が育っていましたが、２m前後ありそうな高い棚は、キュウリ。といっても日本のものより大ぶりで、色も薄い瓜のよう。そして、同様にかなり大ぶりなインゲンがあり、もいで食べてよいとのこと。一口かじると太陽をたっぷり浴びた青く力強い味でした。他に、青菜も育っていましたが、これらの野菜はすべて有機栽培とのこと。近隣の住民が週に一度通って来て、入口にあったようなネットをかける等の具体的な栽培方法、加えて出荷等についての指導を受けているとのことでした。

この事業の目的はファシリテーター育成にもあり、栽培方法も人材育成の面でも、その土地に合わせた持続可能な方法が確実に土地に根を張っていると感じました。技術を学び広げていく村の方々の努力もそうですが、住民の方々に寄り添って目線を合わせ協働し、細かくケアをしている FAO 職員の方々の姿には頭がさがり、感動しました。

現地での参加状況

現地プログラム 4 日目の 11 月 21 日（水）、カンボジアオークルカエ村（Kampong Thom）にて宿泊しました。参加者は 4 つのグループに分かれ、それぞれ村人の家に宿泊しました。参加者は各宿泊先で、対話や共同作業（就寝準備など）により村人との交流を行い、朝・夕に農村の人々が作る郷土料理を全員で囲み、カンボジアと日本の将来について語り合いました。

CSP 参加者の感想①：松崎 映さん

私たちが村に到着すると村長さんの娘が挨拶をしてくれました。その子は大事そうに仔犬を抱えていて私たちが可愛いと言いながら近づくと大事そうに抱えていた仔犬を私の手に乗せてくれました。私は彼女の話す言葉は全然分からなかったけれど、生まれたての仔犬をそっとわたしたちに手渡してくれた仕草から、私たちと距離を縮めようとしてくれていること、信用しようとしてくれていることが伝わってきました。

私たちは普段言葉に全面的に頼り、コミュニケーションを取ろうとします。しかし本来コミュニケーションは相手を自分の中に受け入れるツールでしかなく、その手段は言葉でなくても表情や声のトーン、仕草など様々な要素によって構成されています。大切なのはその後ろにある相手を慮る気持ちであるということ、そんなことを教えてもらった気がします。

CSP 参加者の感想②：大橋さん

この宿泊経験を通して、普段の環境がいかに恵まれているかを再確認することができた。村では生水を口に入れるとお腹を壊してしまう。そのため、歯を磨くときの少量の水でさえもミネラルウォーターを使わなければならず、不便だった。また、当然ながら湯船につかったり温水シャワーを浴びたりすることもできない。結局、寒さに震えながら冷水で体を洗うことになった。これは、体調を崩していた私にとってはかなり辛いことだった。日本では、蛇口をひねれば安全な水を手に入れることができ、スイッチ１つでお湯を沸かすことができる。

上記のような経験をしたことにより、普段の環境がいかに恵まれているかを再確認することができた。次にこの宿泊経験を通して、カンボジアの人々の優しさを実感することができたことが挙げられる。得体の知れない私たちツアー参加者に村の人々は、快く宿泊先を提供し、おいしいご飯を振る舞ってくれた。このような人々の優しさに触れて、私ももう少し他人に優しく接するようにしようと思った。

現地での参加状況

現地プログラム 4 日目の 11 月 21 日（水）12:30～14:30、ナカタアツヒト村（Prasat Sambour 地区）を訪問しました。この村は、1993 年に国際連合カンボジア暫定統治機構（UNTAC）が実施したカンボジア総選挙の選挙監視員であった中田厚仁氏を慕う村人たちが集落となり、現在では「アツ村」と呼ばれる村となっています。現地では、村人との交流を通じて、中田厚仁さんのカンボジアでの功績及び UNTAC と日本との関わりを学びました。

CSP 参加者の感想①：田瀬 和夫さん

中田厚仁さんは私とほぼ同じ年で、私が外務省に入った翌年、国連政策課という PKO 法を担当する部署で働いていた時に、職場で流れる NHK ニュースで彼の悲報を聞いたのを覚えています。私が社会人として歩きはじめた時に、彼はもう国連システムの一部としてとても大きな仕事をされていたわけで、彼の 25 年の人生の中にはものすごくたくさんのことが詰まっていたんだろうなあと思います。今回その 19 年後にコンポントムとアツ村を訪れることができたのは、自分にとっても、自らの国連での使命を再確認する上で極めて大切な機会でした。そして、少なくともその周辺に当時住んでいた人たちと言葉を交わすことができたことは大きな喜びでした。

会場の後ろのほうでくしゃくしゃのおばあちゃんが吉川さんとクメール語で話をされていたのですが、その時の彼女の笑顔が忘れられません。彼女にとっては人生は簡単なものではなかったはずです。それがいま、子どもや孫が成長するのを見ながら笑顔でいらっしゃる。人は強いなあと感じました。そして自分の仕事の中でこんな笑顔を作れれば最高だとも感じました。

CSP 参加者の感想②：田中 陽一朗さん

アツ村を訪問して、国連平和維持活動（UNTAC）がカンボジア社会に大きな貢献をしたことを実感しました。例えば、村の方々とのお話の中で、昔はジャングルだったが、UNTAC および中田厚仁さん・またその父親によって、道路・病院・学校ができたと伺い、この村の方々の生活の向上に大きく貢献していたと思いました。また、教室に中田厚仁さんの写真が壁の後ろに掛けられており、日本人がカンボジアの地方で慕われているのを見て、日本人が世界にできることはまだまだたくさんあるように思いました。

ただ、このような事実をカンボジアの子供達はあまり知らないことや、現在の日本もこのような貢献をしたことが社会的な関心にあまりならないことを見ると、支援の継続性の難しさを感じました。さらに、村の方々が考えている課題として、未だに貧しいことや教員の人材不足のお話を伺い、持続可能な形の支援をどのように行っていけばいいのかと考えるようになりました。しかし、現地の子供達は、写真を向けると笑顔で皆思い思いにポーズを決めていたこと、今後のこの村の未来がとても楽しみになりました。将来、自分も現地の人々と一緒になってより良い平和な社会を築くことができたらと強く実感しました。

現地での参加状況

現地プログラム最終日の 11 月 24 日（土）15:00-16:30、プノンペン市内の Baitong Restaurant にて本プログラムを通して各参加者が考えたこと・感じたことについて全参加者で議論をしました。グループでの議論では、「CSP を通じて考えたこと」についてテーマを絞らず自由に議論してもらいました。全体での議論では、まず、参加者を 4 つのグループに分け、その中で参加者各自が「CSP を通して考えたこと」をテーマに意見を共有、その後、各グループの代表者が、グループ内で出た意見を全体に発表し、最後にこれらの意見について全参加者でディスカッションを行いました。

ディスカッションの概要について：清 衣里奈さん（現地ディスカッション担当）

私たちディスカッション班はこの全体ディスカッションを「CSP 現地プログラムの総括」として位置づけた。そのため、以下の 2 点を重視してディスカッション方法を考えた。1 つ目はメンバー全員が議論に加わることができること、2 つ目は CSP の 4 つのテーマを全て網羅した議論が出来ることであった。

カンボジアの発展について、コミュニケーションの取り方について、CSP というプログラム自体についてなど、実に様々な意見が交わされた。同じ行程を過ごしてきたメンバーであるが、それぞれのバックグラウンドや興味関心分野の違いもあり、多様な意見が出て意義深かった。CSP 全体として 1 つの結論に至ることはなかったが、帰国後も引き続き議論を行い、理解を深めていきたい。

CSP 参加者の感想：井上 良子さん

ほとんどすべての行程を終えた 6 日目の午後に行われた参加者全員による全体ディスカッションでは、班ごとにテーマの絞り方や発表の仕方がさまざまで面白かった。同じ訪問先やブリーフィングでも異なる着眼点をもつ参加者の数だけ感想や意見があり、多面的・多角的に考察できる場になったと思う。班ごとに発表された内容には、必ずしも結論が出るわけではない開発論や未消化のまま残っている疑問点、問題提起なども含まれていたため、たとえば報告会でのディスカッションに組み込むことや事後勉強会を設定するなど、議論を深める事後的な機会をつくるのも有意義かもしれない。

同じ観点から、4 回にわたって行った事前勉強会と何らかの形で連続性をもたせることも考えられ、プログラム全体を見渡したうえで、現地でのディスカッションの位置づけを明確にし、より目的意識をもったディスカッションにできればなお良かったのではないか。建設的な意見としてさらに付け加えるとすれば、現地ディスカッションの回数を増やし、参加者のみならず、現地で出会った方や国連職員の方々を含めた議論の場を設けてもよいと思う。食事の席などで、自然と議論を含めた話はできていたが、もう少し意識的に意見交換できていればより充実していたと感じる。

第４章 運営報告

第１節　　プログラム実行委員会組織概要

プログラム実行委員会組織概要

前回のスタディ・プログラムと同様、実行委員会の発足にあたっては、原実行委員会を立ち上げ、その後実行委員会を設立するという 2 段階のプロセスを設けた。

（1）原実行委員会の立ち上げ

- 参加者を募集し決定するための組織。事前のプロセスを担当し、実行委員会の母体となる。
- 具体的には、テーマ・訪問先の検討、応募要領の作成、参加者の募集・選考・決定を担当した。

【原実行委員会立ち上げ・活動内容】

スケジュール	活動状況
2012 年 4 月	国連フォーラム幹事を中心にテーマ・訪問先に関する検討を開始
5 月	訪問先をカンボジアとラオスに絞り込み
6 月	紛争後の社会という明確なテーマを設定し、訪問先をカンボジアに絞る
7 月	原実行委員会を正式に立ち上げ。テーマ・訪問先を決定 応募要領を作成し、参加者募集の準備を開始
8 月	国連フォーラム幹事総会を経て応募要領を公表（4 日）し、募集開始（締切：20 日午前 0 時） 18 日・19 日に東京・大阪・福岡にて事前説明会を開催
9 月	参加者決定（1 日） 役割分担を決定し、実行委員会が本格始動（11 日）

今回の原実行委員会の発足にあたっては、国連フォーラム幹事会のメンバーを中心に、前回のスタディ・プログラム参加者も加わるという形を採用した。過去のプログラム参加者が加わることでノウハウの蓄積や前回からの改善という点で効果がみられた。また、訪問先であるカンボジアに在住している幹事会メンバーが早い段階で原実行委員会に加えたことで、参加者の募集前に決めておくべき（＝応募要領の作成に必要な）事項の調整にあたり大いに有益であった。

参加者の決定に際しては、前回同様、和文と英文のエッセイを課題として設定し、原実行委員会のメンバーのうち 6 名が、それぞれ内容面や言語の運用面といった観点から採点を行いその結果を集計し、参加者を決定した。次回以降も、今回と同様のプロセスを経て参加者を決定する可能性が高く、次回以降の募集プロセスの公平性を担保する観点から採点基準や採点結果は公表しないが、概ね選考方法は機能していると原実行委員会では認識している。

なお、今回新たな取り組みとして、参加者の今後の参考にという考えから、選考時のエッセイに対し、各採点者の講評コメントを取りまとめ、個別に参加者にお知らせすることとした。年齢やバックグランドも異なる参加者に対して、原実行委員会のメンバーがメンターのような形でフィードバックを行うというアプローチは、特に学生の参加者から好評であったため今後も継続したいと考えている。

（2）実行委員会発足

- 参加者の決定後、全参加者がそれぞれの役割を担いつつ、スタディ・プログラムを運営していくための組織。
- 勉強会、現地渡航に向けた事前準備（プログラム策定・ロジ手配）、現地渡航、渡航後の報告書作成や報告会の開催といった業務を全員で分担した。

委員会詳細は、別途参考資料「表１：実行委員会組織図」を参照いただきたい。

第２節　　プログラム策定

プログラム策定

1. 総括

プログラム策定部分の大きな流れは、策定チームのメンバー編成とその役割分担確定とに連動する形で動いていき、具体的には、プログラム参加者確定前の原実行委員会による原案検討段階（約5ヶ月間）とプログラム参加者とその役割分担確定後の検討・準備段階（約3ヶ月間）において、策定されていった。詳しくは後述の参照資料「表2：プログラム策定プロセス一覧（概略）」を参照いただきたい。

（1）原実行委員会による原案検討段階

昨年度のスタディ・プログラム企画・運営幹事を中心に構成された原実行委員会（11名）でまず行うのは、プログラム訪問国の決定である。①何を学ぶかというプログラム内容・目的の観点、②現地の受け入れ体制の観点、③実施時期や地理的な観点、④訪問国の政情や特定の状況（首脳会議の開催など）の観点⑤前回プログラムとの比較の観点から、総合的に検討して候補を絞っていった。ここでプログラム実施とその成否の決め手となるのは①と②であり、単純な興味関心から訪問したい国を決めるのではなく、訪問の具体的な目的や問題意識と現実的な実現可能性をしっかりと定めることが重要である。

今回の特徴としては、原実行委員のメンバーのうち2人と次の段階で策定チームに加わる参加者の1人が現地に在住・駐在していたことから、訪問先機関のみならず参加者メンバーも現地受け入れ体制の確保に大きく貢献していた点である。この段階で策定した原案は、プログラムの方向性と目的を踏まえ、ある程度の実現可能性（行程、ロジ、訪問先の候補、現地のサポート体制など）が見込まれるたたき台となっていた。

（2）参加者確定後の検討・準備段階

約2週間の参加者選考期間を経て最終的に確定したプログラム参加者（25名）とともに新しい役割分担を決定し、本格的なプログラム策定を開始した。「みんなでつくる」ことを方針とするスタディ・プログラムにおいては、前回の経験と今回特有の事情を踏まえて決定される役割分担とそのチームワーク、全体としての足並みを揃えることがプログラム策定過程での大きな鍵となっている。逆から言うならば、チームワークが最大限に発揮されるグループ・チーム分けと運営のしくみを整えることが重要である。

【グループ編成】

グループ名	各グループの活動内容
運営グループ	全体の運営管理／名簿管理・調整
財務グループ	プログラム全体の予算決定／集金・出納・払戻
企画グループ	プログラム策定・ロジチーム／しおり作成チーム／補強チーム
研究・アウトリーチグループ	研究・勉強会チーム／広報・アウトリーチチーム

4 つの各グループにリーダーと、各チームにフォーカルポイントを置き、役割分担に基づくグループ・チームごとの縦の動きと、各チームとの連携・調整という横の動きを同時進行で行い、総括としての実行委員長による定期的な全体チェックを引き締めポイントとすることで、全体としては各グループの主体的なチームワークを最大限に引き出せたといえる。

2. 具体的な運営報告

（1）運営上難しかった点

- プログラムの柱となるテーマが 4 つあったことで、多角的に学ぶことができる半面、プログラムを策定するうえでは、ロジとの関係で散漫な行程にならないようにすること
- 複数にまたがる現地アポイントメントの調整
  - テーマと連動して複数に渡った現地の諸機関とのアポイントメント確定のための連絡業務、チーム・グループへの報告、全体プログラムへの反映と調整に時間がかかった点
- チーム・グループ間での連携・連動
  - プログラム策定に時間がかかることで、しおり作成チームやオプション部分の行程や航空券の共同手配を担当する補強チームにも遅れを生じさせ、直前の最終確認や調整が大変だった点
- 「みんなでつくる」運営原則を貫徹すること
  - 参加者アンケートを集約し、全体に反映させる過程、チームでの確認・協議事項がグループや全体に諮られる過程で意思決定に手間と時間がかかった
  - 主体的に率先して動くメンバーとそうでないメンバーがいた点

（2）工夫した点

- メールベースで報告・連絡・相談を行う際のルールを定めたこと
- 定期的なハングアウトによるミーティングで全体的な確認・決定を行ったこと
- オンライン上で共有できるドキュメントツールなどを活用したこと
- 必要に応じてコミュニケーションツールを使い分けたこと

3. 今後の課題と提案

- プログラムのテーマ決定の段階で、現実的な実行面の観点からも検討し、場合によってはテーマを絞る必要性を考慮すること
- プログラムの目的や参加者の意向を重視することと現実的な安全面上の配慮や責任の所在との関係においてバランスを考えること

- 「みんなでつくる」運営原則は維持しながらも、リーダーに一定の決定権を与える、参加者全員の同意を得る事項を選別するなど、意思決定プロセスを改善する
- 参加者間のコミットメント度合いの差をどう考えるかは引き続き課題
- プログラムの成否にかかわる現地ロジ部分での関係者間との打ち合わせ、契約の締結を含めた合意の形成を早い段階で固めること
- どの時期に何を終えておくべきか、逆算した計画をより綿密に立てること

第３節　　ロジ手配

ロジ手配

1. 総括

ロジ担当者が複数に渡ることは各行程で綿密な準備ができるメリットがある一方でその担当者間のやりとり・責任の所在の明確化が必要になることに注意すべきである。各メリット・デメリットおよび、安全面を考慮してツアーの要求内容のバランスを検討する必要がある

国連フォーラムとして特に責任の所在について議論を行なっておくべきではないか。この手のプログラムを継続して行うためにどこまでフォーラムが責任を負うのか、どこまで委託するのか、参加者はどのような認識でいるべきかについて明確にされているとよい。そのためにも、プログラムの集合および解散についてはシンプルにするなど工夫が必要である。詳しくは、後述の参照資料「表 3：現地手配詳細」を参照いただきたい。

2. 具体的な運営報告

（１）概要

今回の特徴はカンボジアの中でも訪問地が複数にまたがったことである。オプションではタイからの陸路での国境越えという経路もあったため、ロジ手配は複雑であった。また公式集合を 18 日の昼に設定したが実質的には前日の非公式夕食会でほとんどが現地入りをし、その前のオプションですでに集団による移動が存在しているなど、公式集合前にもいろいろなロジ手配が必要になっていた。出入国日程・時間や緊急連絡先、アレルギー情報等は策定・ロジ班が事前アンケートをとり把握していた。

そこで、ロジ手配の部分を確実におよび補強する目的で、メイン行程は現地旅行業界に精通している方（吉川さん）と業務委託契約を締結し、主には①FAO、②委託先、③オプション班などの参加者担当の 3 つで主にロジ部分を担当していたといえる。

（２）各手配によるメリット・デメリット

- FAO など国際機関による手配
  - 通常ではできない手配・多少無理な手配も通すことができる場合がある。
  - やりとりを通じて参加者と国連機関関係者の間において事前に関係性の構築ができる。
  - いわゆる国際機関という存在の力に依存してしまうため、その中でどれほどのやりとりがなされているのか、どのようなパワーがはたらいてロジが可能になっているか参加者が把握しづらい。主体的な手配感が薄まるおそれがある。

- コミュニケーションのやりとりに十分対応できる人物が必要。

- 外部委託による手配
  - 現地の相場観や土地勘、タイムライン、安全面等に関する経験豊富な見識に基づいて、予約手配を行うことができる。また、上記見識からアドバイスを受けることができる。
  - ネットからのみでは不安の残る途上国での予約手配について確実に準備することができる。
  - 特殊・複雑な手配にも対応してくれる場合がある。（委託先による）またトラブル時に対応を依頼できる。
  - コストがかかる。
  - 担当者とのコミュニケーション方法の認識（参加者がどこまで意思決定に関われるのか等）のすり合わせが必須である。またそのようなコミュニケーションに応じてくださる人物を見つける必要がある。
- 参加者による手配
  - 学びの機会になる。ロジ手配を通じて現地調査、現地とのやりとりが発生するため。ロジ手配にも主体性を持って取り組むことができる。
  - 希望等を反映させた手配がしやすい。
  - 現地の相場観や土地勘、タイムライン、安全面等に関しての見識がないため手配担当者に負担がかかる（不安を感じる、料金の前払い等についても負担がかかる）。
  - 手配が確実に行われているかどうか不安が残る。

【上記を踏まえてのコン・プロ】

コン・プロ
●上記それぞれのメリット・デメリットがある中で各種行程に応じて担当がいたことでバランスよく手配をお願いすることができた。メインの行程以外にも吉川さんにアドバイスを求めることができた。 **●車両に関しては一貫して外部委託先の手配にすることで、滞りなく行程を進めることができた。** **●一方で各担当者間のやり取り（とくに FAO 部分と吉川さんの部分）が必要であった。**

（3）業務委託契約に関して

- 契約書の締結に時間がかかってしまったため依頼する場合は事前に準備することが望ましい。
  - 行程を決めていく中でロジ手配の担当部分に変更が出てくる場合もあるため、そのような場合に備えた条項を用意しておくべきである。
- 責任の所在に関する議論をできるだけ事前に、詳細に行うべきである。
  - 基本的に、個人の有志が集まって行なっている本企画において、責任の所在を明確にすることに困難が生じていると考えられる。
  - 例えば、今回の行程では、手配担当者が複数に渡っているため、行程によって責任を担う箇所にギャップが生じてくる。
    - 国際機関担当手配部分に関するトラブルは外部委託先が追うことは難しい。

- 車両手配は一貫して外部委託先の担当であったが一方で行路の詳細な検討は国際機関に任されていた。仮にその行程でトラブルが生じた際にどのように事態をとらえるのか等についても、国際機関および外部委託先と詳しく議論しておくべきであったといえる。
- 今回は、業務委託契約書 14 条「旅程参加者が、プログラムの催行に際して罹患した傷病及びその治療に要した金額については、乙の故意又は重大な過失による場合を除き、乙の損害賠償義務を免除する」という免責条項によって合意を得たものの、これでは契約に応じない委託先があっても不思議ではない。

- ベストは外部委託先であった吉川さんのような方が全行程に添乗することである。必要であるならばその条件を委託業務にも盛り込んでおくべきである。
  - ただ今回は次善の策として、外部委託先である吉川さんと FAO の担当者と事前に MTG の場を設けロジについて対面で確認を行っていただいた点、全行程に関して電話での確認に応じてくれていた点は考慮すべき。
  - しかし、トラブルがあった際の対処法について事前に説明があるべきであった。今回プノンペンのガイドには問題があったといってよい。その場合、不安を感じた時点で連絡しガイドの交代を要請できるなど、対処法についても明確にできていれば改善できた。

（4）航空券手配/集合について

- 集合時間を揃えるべき/まったくの現地集合に徹底するのがよいのではないか
  - 各人のフライトスケジュールの把握は非効率的であるとともにホテル到着までの安全面の担保についてはロジ・策定班担当者が追うことは負担が大きいと考えられる。
  - 安全面を考慮するのであれば、航空券を完全に旅行会社に依頼して共同購入し現地入りの時間を揃えるべきではないか。
  - ないしは、全くの現地集合（今回であればホテルに 11:45 など）にしてそこまでの手配はロジ・策定班の範疇には及ばないものとするべき。（しかしこの場合の治安・安全面はやはり看過できないのではないか。となれば上記のように現地入りの時間を揃えるべきでは？）
  - 今回も、事前アンケートで到着時間を把握していたがその時間に集合できない参加者が存在した。その点でロジ・策定班は安否の確認に物理的・精神的にも懸念を持ったまま行程を進める必要があった。また到着時間によって個別送迎を必要とする場合もあった。
- またもし集合時間を揃えない場合、航空券の共同購入はあまり効率的ではない
  - 金銭的に共同購入担当者の負担がかかる、共同購入することで価格があがる可能性がある。
  - 今回はオプション行程にかかる空路移動者のみ、同じ時間帯のチケット取得を行った。シェムリアップ到着後の移動の安全面・ロジの簡略化といった理由から。しかし各人で同じ航空券を購入するのは非効率的であったといえる。（特に今回は陸路空路のオプションがあったために、意思決定が遅れたため急遽、空路移動者は一斉に購入することが必要になった）

3. 全体を振り返って

- 今回の手配は現地旅行会社では到底対応できない（あるいはVIP待遇と同等のツアー要求の）ものである。
- 有志の個人が集まるツアーであるとはいえ、一部担当者がメインで行程を組み、それに沿って集団が行動している以上は、何かトラブルがあった際に個人の責任というだけでは不十分な点が出てくる。
- 手配担当者間およびフォーラム内部でも本プログラムにおいてどのように責任の配分を行うのかを議論しておくのが良い。また安全面に関するレクチャーや注意事項の説明を実施するなどして個人にかかる責任の所在を明確にしておくのも必要ではないか。
- 安全を担保できない点があるのであれば、ツアーの要求レベルを少し下げることも考慮する心づもりでいたほうがよい。

第４節　　会計報告

会計報告

1. お金の取り扱いについて

（１）原則

最小限のコストに抑える方法を検討する。また、プログラム全体に関わるものはすべて参加費として集金した中から賄う。

（２）予算

予算は事前準備・現地行程・事後報告の3つに分けて考えた。事前準備・事後報告については前回の経験からだいたいの金額を予想して立てた。現地行程についてはプログラム・ロジ班がFAO、吉川舞さん（現地でホテル等の手配をお願いした方）と調整した結果を用いて立てた。

（３）集金方法

参加費として1人50,000円を集金した。原則銀行振り込みとし、海外在住の希望者には現地でお支払いいただくことも可能とした。銀行振り込みで集金したものは財務係がまとめて両替した。現地手渡しの場合はそのレートで換算した金額をドルで受け取った。

（４）支払い

支払い方法は大きく分けて3通り。1つ目がFAOを通じた支払い（主に農村ステイの際）、2つ目は吉川舞さんを通じた支払い（車両代・農村以外のホテル代・ガイド代など）、3つ目は財務係から直接の支払いであった（水・レストラン代など）。また、部分参加者へは現地にてドルで返金した。返金に該当するものはホテル代と食事代とした。

2. 機能したプロセス

今回は財務係が2人いた。そのため互いに予算の議論や、出納のチェックをすることができ、お金についてより細かく取り扱うことができたと思う。また、現地で何らかの意思決定が必要な際に財務の観点から関わることができたのは良かったと思う。

3. 機能しなかったプロセスと次回に向けた改善点

主に次の 3 点である。1 つ目は財務係内での作業分担が不十分だったこと。結果、2 人が思い思いに作業を進めてしまい、非効率であった。2 つ目はお金の取り扱い原則について参加者への徹底不足である。これを踏まえて、次のような改善点が挙げられる。

- はじめに「誰が」「何を」「いつまでに」進めるのかを明確にしておく
- お金の取り扱い原則について参加者に何度かリマインドする
- その他、今回の経験から次回に活かすことができると思った点を述べておく。
- 費用を安く抑えたいという参加者のニーズがあるため、ホテルを相部屋にするという選択肢を考えておく。

4. 決算表（1US ドル=81.5 円で計算）

【収入】

内訳	金額
参加費（日本円）	¥950,000
参加費（US ドル）	$3,678.00
合計	950,000 円+3,678US ドル
円換算	¥1,249,757

【支出】

内訳	金額
＜事前準備＞	
勉強会会場費	¥14,130
Wimax 代	¥26,400
お菓子代	¥500
延長ケーブル代	¥1060
SD 代	¥4,463
しおり代	¥10,530
オフ会	¥6,800
両替送料	¥500
薬剤代	¥10,605
おみやげ代	¥23,927
小計	¥98,915
＜現地＞	
食費	$2,614.55
宿泊費	$4,260.00
ガイド・通訳・手数手配料	$1,292.00
訪問料	$476.00
車両代	$1,500.00
その他	$357.65
部分参加者への返金	$1,090.00
小計	$11,590.20
円換算	¥944,601

＜事後報告＞	
小計	¥0
合計	¥1,043,516

総計：収入（¥1,249,757）－　支出（¥1,043,516）¬＝　余剰金（¥206,241）
この余剰金を参加者の人数で割った金額を、それぞれの参加者が支払った通貨（日本円またはUS ドル）で返金する。※参加者には返金方法を別途通知する。

第５節　　現地での保健・健康状況

現地での保健・健康状況

1. 総括

途上国では環境や気候、衛生状態、食事等が異なり、更に旅の疲れから日本では症例の少ない感染症に罹患すること、体調を崩すことが考えられた。その為準備段階では、現地で罹患する可能性のある感染症についての知識を深めるとともに、起こりうる症状に対する正しい対処法を学んだ。そして必要な薬剤、皮膚保護材等を調達し救急箱を準備した。また、どんな症状が出たら医療機関への受診が必要なのか、ということについても情報収集した。

現地で多く見られた症状は下痢、便秘であった。下痢に対しては脱水予防を目的としたこまめな水分の摂取を呼び掛けるとともに、だるさや発熱のある参加者には経口補水液（Oral Rehydration Solution :ORS）を使用した。また便秘に対しても十分な水分の摂取と経口整腸剤を使用した。

毎朝参加者へ紙を配りその日の体調を記入してもらうことで一人一人の体調を把握することが出来た。しかし体調が悪くても我慢してしまう参加者もおり、今回受診が遅くなることがあった。そのため今後の課題は、どのように受診が必要と判断するのか、という点ではないかと考えられる。係は受診が必要とされる基準を把握した上で、病院へのアクセス等を考慮に入れた判断を現地の方と情報交換しながら行っていく必要がある。また、係から声を掛け参加者の状態を細やかに把握しようとする姿勢が大切である。

第６節　　参加者による事後アンケート内容と結果

参加者による事後アンケート内容と結果

1. 総括

次回以降のプログラム企画の参考に資するため、現地渡航が終了した時点で全参加者を対象にアンケートを実施した。アンケートは、オンライン・アンケートのサイトである Survey Monkey を利用し作成した。アンケート結果の詳細は、後述の参照資料「表 4：CSP 参加者アンケート集計結果（2013 年 1 月作成）」を参照いただきたい。

2. 具体的な運営報告

（1）アンケートの概要

アンケートの概要	
実施期間	12 月 2 日～10 日
対象	現地渡航しなかった参加者も含めた全参加者
質問形式	選択肢＋自由記載
質問内容	1. 参加者の属性：学生・社会人の別、居住地、現地渡航の状況 2. 勉強会の評価：有意義だった点、改善すべき点 3. 渡航に向けた事前準備の評価：全般、担当業務別のコメント 4. 現地渡航の評価：訪問先全般、最も有意義だったもの、最も有意義でなかったもの 5. プログラム全体の評価 6. 次回以降のプログラムへの参加意向

（2）コメント

作成にあたっては、選択肢による設問を中心に、回答しやすい設問とするよう留意したが、結果的に、自由記載欄に有益な数多くのコメントが寄せられたのが、嬉しい誤算であった。プログラム全体としては、5 点満点で参加者平均が 4.70 であったため、概ね高い満足度が得られたと考えている。

勉強会では、現地渡航に向けた知識の習得、自分の関心分野への知識の習得といった点で満足度が高い反面、参加者間や外部から招いた講師の方と議論する十分な時間が取れなかった点が改善として挙げられる一方、事前準備のプロセスでは、各チーム間の連携、各参加者間の業務分担や実際の貢献にバラツキが見られたといった業務遂行上の課題が指摘された。

現地渡航では、FAO アレンジによる農村での宿泊、カンボジア特別法廷やかものはしプロジェクトの視察が高く評価されていた。一方、訪問先が多すぎる、消化する時間が足りない、参加者間や参加者各自が内容を確認したり、議論して理解を深めたりする時間がほしい等、ゆとりをもったスケジュールを求める声も多く寄せられた。

このほか、さまざまな運営全般に関するコメントも寄せられたので、これらをもとに次回以降のプログラムの改善に役立てていきたいと考えている。具体的には、勉強会の時間配分、回数や構成の見直し、事前準備の組織の見直しを行うとともに、スタディ・プログラムの根幹となるテーマの位置づけ（広く浅く or 専門的に深く）、現地渡航時の訪問先（多く or 厳選）、現地でのディスカッションの役割（訪問重視 or ディスカッション重視）といったジレンマが生じやすい部分について、必要に応じバランスを改めたいと考えている。

最後に、このスタディ・プログラムの満足度を高めている要因として、参加者との出会い、業務を通じたチームワークの形成といった参加者間の人間関係に言及する回答が非常に多く、これが「みんなでつくる」スタディ・プログラムの強みであることは間違いないので、その強みは引き続き活かしていけるようにしたい。

第７節　　ソーシャル・メディアの活用とアウトリーチ

ソーシャル・メディアの活用とアウトリーチ

1. 総括

今回のスタディ・プログラムでは、広報の一環としてウェブサイトともに、フェイスブックやツイッターといった、いわゆるソーシャル・メディアも試行的に活用した。まず、ウェブについては、参加者募集のための応募要領の公表の際に専用ページを作成した。参加者が確定してからは、参加者専用セクションとしてパスワード保護を行い、誰でも閲覧できる部分と異なる取扱いとした。ページの管理にあたっては、各担当メンバーからの情報掲載のリクエストに応じその都度ページを更新することとし、常に最新の情報が提供できるように心がけた。渡航時のスケジュールや勉強会の資料などを掲載しており、今、現在もページの更新を続けている。（参考、CSP ウェブページリンク：http://www.unforum.org/project/cambodia/index.html）

一方、フェイスブックやツイッターは、さまざまな理由で現地に行くことが出来ない人たちを念頭に、このプログラムの実況中継を行うために活用した。これらソーシャル・メディアの活用にあたっては、今後のスタディ・プログラムへの参加、国連フォーラムへの関心、カンボジアへの興味といったことへのきっかけになればという想いから、フランクな文体を心がけた。

ツイッターでは、携帯を使ってその場から、感想やどんなことを行っているかなどを可能な限り写真付きでつぶやくこととした。その際、つぶやいた人の名前を明記することで「みんなでつくる」プログラムとしての意識を高めることができた。また、フェイスブックでは、１日に１回写真付きで一日の流れを簡単に振り返る日記として投稿することとした。

結果として、フェイスブックでは 79 人、ツイッターでは 78 人がお気に入り登録やフォローしてくれている。（以下、ページリンク貼り付け）

- CSP Facebook ページ：https://www.facebook.com/unforumcsp2012
- CSP Twitter アカウント：https://twitter.com/2012CSP

反省点としては、特にツイッターにおいて、つぶやく人に偏りがでたことがある（現地の携帯（正確に言うと現地の SIM カード）を使っている人が限られていたことが原因だろう）。次回からは、例えば必ず 1 回は各参加者がつぶやくこととし、同時に有志でつぶやきたい人もつぶやけることとすれば、より「みんなでつくる」プログラムらしさが発揮されるのではないかと思う。

第８節　　事後報告会の実施状況

事後報告会の実施状況

1. 目的・趣旨及び内容

- プログラムの実施報告・プログラム参加者が現地で得た知見や経験のアウトプット
- プログラム参加者による問題提起に基づく報告会参加者との双方向の議論の場

- プログラム参加者の問題提起に対してコメンテーターなどの識者の知見を得る場
- 次回スタディ・プログラムの告知

2. 事後報告会について

2012 年 11 月に「国連フォーラム」主催で行われた「みんなでつくるカンボジア・スタディ・プログラム（CSP）2012」の報告会を日本各地以下の日程で開催した。今回の報告会は①国連フォーラム「カンボジア・スタディ・プログラム」参加者からの報告・発表、②ゲスト講師からのコメントや意見交換、③報告会参加者とのオープンディスカッション、④次年度スタディ・プログラムの説明などを盛り込んだ。報告会では、カンボジアに関する議論に限定せず、各会場のゲスト講師や参加者の方と国際協力についての議論や懇親会も実施した。

（1）第 1 回：九州会場

【日時】2013 年 2 月 15 日（金）15:00～18:00

【場所】西南学院大学(福岡市早良区西新 6-2-92) 1 号館 305 教室

http://www.seinan-gu.ac.jp/campusmap.html

【講師】富田 麻理　准教授　（西南学院大学　法学部）

成田 健二　調整官　（国連ハビタット福岡本部）

（2）第 2 回：大阪会場

【日時】2013 年 2 月 16 日（土）14：00～17：00

【場所】大阪大学豊中キャンパス国際公共政策 研究科 2F 講義シアター

http://www.osaka-u.ac.jp/ja/access/toyonaka

【講師】星野 俊也　教授（大阪大学国際公共政策 研究科）

（3）第 3 回：東京会場

【日時】2013 年 2 月 17 日（日）13:00～15:30

【場所】筑波大学東京キャンパス文京校舎　5 階 504 号室

http://www.tsukuba.ac.jp/access/bunkyo_access.htm

甲斐田 万智子氏　（国際子ども権利センター　代表理事）

柏木 健一　准教授　（筑波大学、人文社会科学研究科）

市川 政雄教授　（筑波大学　ヒューマンケア科学専攻）

第５章 次回に向けて

～国連フォーラム幹事会スタディ・プログラム班からのメッセージ～

国連フォーラム主催のこのスタディ・プログラムには本当にたくさんの魅力が詰まっている。しかし、第５章第６節のアンケートの結果にもあるように、まだまだ改善の余地があるのも事実であり、次回に向けて、より質の高いスタディ・プログラムを企画し、将来の参加者の皆さんにどれだけ高い価値を提供できるのかということにこだわっていきたい。

まず、この国連フォーラムのスタディ・プログラムの存在をしっかり浸透させること。学生・社会人を問わず、熱意をもった参加者が各地から集まることは、この「みんなでつくる」プログラムが高い価値を生み出すための大前提となる。このプログラムでは参加者全員が同時にプログラムの運営者でもあるので、将来の参加者となるであろう関心層へのアプローチは、将来のプログラム運営において非常に重要だ。

もちろんスタディ・プログラムの内容そのものも見直しが必要である。今回の参加者事後アンケート結果をもとに、プログラムの事前準備や現地渡航の運営のプロセスを見直すとともに、一般的なスタディ・ツアーでは味わえないような質の高い体験が得られるようコンテンツを磨いていきたいと考えている。

最後に、低コストに抑えることで参加者の満足度を引き上げることも忘れてはいけない。「みんなでつくる」というこのプログラムの特徴のおかげで、参加者が自らプロフェッショナルな運営の経験を積むのと同時に、そのおかげでコストを低減することができる。満足度を高めると同時にコストを下げられるというのは、まさに「みんなでつくる」スタディ・プログラムの強みだ。

これからも、多くの方に現場を訪れていただき、その前後で新しい仲間たちと出会い、一緒に準備を進めたり、学んだり、そんな貴重な機会を生み出していくのが、このスタディ・プログラムの存在意義であり、そのような中で得られた参加者同士のネットワークは本当にいつまでも続く強固なものだと確信している。今まで一緒に過ごしたメンバーは、プログラムが終了してもメンバーであり良き仲間であり続ける、そんなスタディ・プログラムを目指していきたい。

国連フォーラム幹事会スタディ・プログラム班一同
坂本篤紀、小林真由美、西崎萌

運営報告：参考資料

表 1：実行委員会組織図

事前		現地	
班名	役割ないしチーム分け	班名	役割
実行委員会運営グループ	全体の運営管理 名簿管理と調整	運営総括グループ	全体の運営管理と調整、緊急事態等における意思決定など。
財務グループ	各班との協議でプログラム全体の予算決定、集金、出納、払い戻し等	**財務グループ**	換金、出納、現金管理
企画グループ	プログラム策定＆ロジチーム： ・プログラムのそのものの細部策定 ・関係機関や組織団体との協議・交渉 ・現地のエージェントの監督と協議 ・財務班と共同で予算見積りなど。	**企画グループ**	宿舎係 ・宿舎との調整を一括管理
			配車・交通係 ・出発時の点呼などを徹底
			保健係 ・薬箱の用意や体調不良になった人の緊急対応
	しおり作成・現地交流チーム： ・各班やチームと連携した上で事前にしおりを作成、印刷して参加者に郵送するとともに電子版を配布 ・訪問するコミュニティへのおみやげや、その場での参加者側からのパフォーマンス（歌を歌ったり踊ったりなど）を計画		現地交流チーム： ・現地でお世話になる方、コミュニティなどとの交流を主導する ・歓迎の言葉や、おもてなしに対するお礼を伝える
	プログラム補強チーム： ・合同渡航を含むプログラム前後のオプション手配 ・前日事後などの共同宿舎手配、陸路車両手配 ・プログラム中の夕食の選択肢提示 ・その他エンターテイメント要素の提示 ・これらについての車両手配を含むロジ担当など		プログラム補強チーム： ・プログラム中の昼食手配 ・夕食の選択肢の提示と先導 ・自由行動日のオプション提示
研究・アウトリーチグループ	広報・アウトリーチチーム： ・国連フォーラムウェブへの情報の掲載 ・ソーシャルメディアを活用した広報と情報共有 ・国連フォーラムの他の企画と合同で現地でのインタビューなどを計画 ・事前オフ会の計画	研究・アウトリーチグループ	写真・映像チーム： ・のちの記録のために静止画、動画などを撮影
			ソーシャルメディアチーム： ・CSPの活動を現地からFacebookやTwitterに投稿
	研究・勉強会チーム： ・勉強会の企画策定 ・勉強会のロジの計画と実施 ・外部講師との連絡調整 ・勉強会の記録の作成 ・掲示板の立ち上げ・運用		ブリーフィング・ディスカッションチーム： ・現地でのブリーフィングの実施 ・ブリーファーとの連絡調整 ・ブリーフィング関係ロジ ・ブリーフィング記録作成 ・参加者による現地での議論の場設定 ・議論の進行 ・記録の作成

©UN FORUM STUDY PROGRAM

表 2：プログラム策定プロセス一覧（概略）

	プログラム策定チーム		ロジチーム ･補強チーム	しおり･交流チーム
	企画業務	調整業務		
2012/3月末	渡航先の検討開始			
4月～	原実行員会で議論			
5月	渡航先の決定			
2012/6/12	CSP趣意書案の検討開始			
	CSP趣意書の幹事会への共有			
2012/7/28	CSP趣意書の完成			
	応募要項の作成			
2012/8/4	参加者募集 ･幹事総会＠東京			
2012/8/8	CSPウェブページ作成			
2012/8/12	原実行員会内の役割分担決定			
2012/8/18	事前説明会の開催			
2012/8/19	CSP企画キックオフM tg①			
2012/8/20～	参加者選考			
2012/8/26	企画M tg②			
2012/9/1	参加者決定 CSP始動			
2012/9/2	企画M tg③			
		役割分担の編成		
2012/9/8	行程案①共有			
2012/9/11	役割分担決定①			
2012/9/16	新体制でのキックオフM tg④			
	行程詳細の検討			
	顔合わせハングアウト			
2012/9/23	企画M tg⑤	企画班メンバー補強		しおり企画の議論開始
		掲示板設置の検討		
		メールのルール共有		
2012/9/26	役割分担決定② 最終）			
2012/9/27	行程案②共有		ロジ補強チーム検討開始	
		しおりチームと連動		
2012/9/30	訪問先の情報共有	CSP参加者FBページ設置		
		現地ガイドとの調整開始		
				交流 ･お土産検討開始
			現地ロジ手配の検討本格化	
		UNF他企画との連携検討開始	現地ガイドとの打ち合わせM tg	
2012/10/7	企画 ･運営Gの進捗確認M tg	ロジチェックリストの作成開始	参加者へのロジアンケート①	しおり作成の計画作成
	暫定行程案のウェブへのアップ			
		プログラム費用の見積もり決定		
2012/10/10		ロジチェックリストの共有		しおり作成の分担決定
			共同手配の取りまとめ	
2012/10/14	エッセイ講評のフィードバック			
2012/10/17			ロジ手配M tg	
2012/10/20			ビザ ･保険についてアナウンス	
2012/10/22	各プログラムの詳細詰め開始			
2012/10/23	各準備の進行状況確認		参加者へのロジアンケート②	
2012/10/26		参加費の徴収		
2012/10/27	勉強会後にプチオフ会実施		現地での手配 最終確認	
2012/11/2		予算の中間確認	現地ガイドとの契約案作成	
2012/11/3	各プログラムの詳細 最終詰め		現地での手配 最終詰め	交流企画の最終検討
2012/11/4	最終行程の共有	プログラム詳細費用の確認		
2012/11/6			現地ガイド再委託問題の議論	
2012/11/7	未成年参加者保護者への同意文書			
2012/11/8				
2012/11/10	企画M tg⑥ 最終確認）			
2012/11/11			参加者へのロジアンケート③ 最終）	
2012/11/12			現地ガイドとの契約締結	
2012/11/13		CSPツイッター開設		しおり完成

©UN FORUM STUDY PROGRAM

表 3：現地手配詳細

	場所	場所	ロジ			
			詳細	FAO	委託(吉川)	参加者
OP	11/16(金)	バンコク	【P補強班】 集合場所・車の手配・夕食を検討			・車両 ・夕食 ・宿泊
OP	11/17(土)	シェムリアップ	【P補強班】車の手配および空路移動を検討。非公式顔合わせ夕食会の会場等を手配。			・車両 ・夕食
DAY1	11/18(日)	プレアビヒア	【P補強班】アンコールワット訪問希望者募る？ ■吉川さん手配：車、ガイド、昼食、夕食 ■FAO：宿泊先	・ガイド ・宿泊 ・夕食	・車両 ・昼食	
DAY2	11/19(月)	プレアビヒア	■FAO：ガイド、昼食、夕食、宿泊先 ■吉川さん手配：車	・ガイド ・宿泊 ・昼食 ・夕食	・車両 ・夕食	
DAY3	11/20(火)	シェムリアップ	■FAO：ガイド、昼食 ■吉川さん手配：車、宿泊先、昼食 ■P補強班夕食のオプション検討	・ガイド ・昼食	・車両 ・宿泊	・夕食
DAY4	11/21(水)	コンポントム（農村宿泊）	■吉川さん手配：車、昼食、ガイド（吉川さん自身）、宿泊先、夕食		・車両 ・昼食 ・夕食	
DAY5	11/22(木)	プノンペン	■吉川さん手配：車、昼食、ガイド、宿泊先		・車両 ・昼食 ・ガイド ・宿泊	
DAY6	11/23(金)	プノンペン	■吉川さん手配：車、ガイド、昼食、宿泊先		・車両 ・ガイド ・宿泊	・昼食
DAY7	11/24(土)	プノンペン	■吉川さん手配：車、ガイド、昼食、宿泊先、夕食		・車両 ・ガイド ・宿泊	・夕食
	11/25(日)		各自			

©UN FORUM STUDY PROGRAM

表 4： CSP 参加者アンケート集計結果（2013 年 1 月作成）

1 今回の参加者（n=29）

学生・社会人	回答数
学生	13
学生（社会人経験あり）	2
社会人	14

居住地		回答数
日本国内	東京周辺	11
	大阪周辺	7
	その他	4
国外		7

現地渡航	回答数
タイ（事前日程）＋カンボジア（全参加）	20
カンボジア（全参加）	2
カンボジア（部分参加）	4
現地渡航せず	3

2 プログラム全体の評価

＜評価基準＞ 5：非常に満足 4：満足 3：普通 2：やや不満 1：非常に不満

	平均	5	4	3	2	1	該当なし
プログラム全体（勉強会・事前準備・現地渡航）	4.70	19	8				
勉強会	4.11	10	10	7			
事前準備	3.81	5	12	8	1		1
現地渡航	4.83	20	4				3

3 勉強会の評価

【有意義だった点】 ※最大2つまで選択可

項目	回答数
1)現地渡航に向けた知識の習得に役立った。	16
2)自分の関心のある分野または自分の知らなかった分野に関する知識の習得に役立った。	16
3)将来のキャリア形成に向けた知識の習得に役立った。	4
4)発表者として調べてきたことを発表したり、逆に発表者に対して質問したりする等、プレゼンテーションやディスカッションの練習として役立った。	5
5)他の参加者と交流する機会として役立った。	8
6)外部講師の方から学ぶ機会として役立った。	7

【改善すべき点】※最大3つまで選択可

項目	回答数
1)現地渡航に向けた準備として内容的に十分ではない。	4
2)得られる知識の量や質という点で十分ではない。	4
3)将来のキャリア形成に向けて参考になる内容が得られない。	2
4)回数（計4回）が少ない。	1
5)回数が多い。	0
6)1回あたりの時間が短い。	1
7)1回あたりの時間が長い。	1
8)各回の開催間隔が短い。	1
9)質疑応答等、参加者同士の議論の時間が短い。	15
10)外部講師が勉強会のテーマに相応しくない。	0
11)他の参加者や外部講師と個人的に話す時間がない。	6
12)会場までのアクセスが悪い。	4
13)会場の施設・設備が十分ではない。	2
14)Google+ Hangoutのためのオンライン環境が十分ではない。	10

4 現地渡航に向けた事前準備の評価

【事前準備全般】

＜評価基準＞ 4：非常にそう思う 3：そう思う 2：そう思わない 1：全くそう思わない

項目	平均	4	3	2	1	不明
1)業務はやり甲斐があった。	3.41	13	12	2		
2)業務量が多かった。	2.52	2	12	11	2	
3)業務内容が難しかった。	2.15	1	6	16	4	
4)業務を通じて、チームワークを発揮することができた。	3.20	9	13	2	1	2
5)業務を通じて、他の参加者（チーム以外の参加者も含めて）について良く知るきっかけになった。	3.42	15	7	4		1
6)業務を通じて、自分の事務処理能力が向上したと思う。	2.64	4	12	5	4	2
7)業務を通じて、自分なりにプログラムに貢献できたと思う。	2.88	5	14	6	1	1

5 現地渡航の評価

【現地渡航全般】

＜評価基準＞ 5：非常に有意義 ～ 1：あまり有意義でない

	平均	5	4	3	2	1	該当なし
1)FAOバンコク事務所での概要説明（16日@Bangkok：非公式）	4.24	7	7	3			10
2)JSPSバンコク事務所での概要説明（16日@Bangkok：非公式）	3.67	3	6	9			9
3)FAOのMALISプロジェクトに関する概要説明（18日@Siem Reap）	4.17	9	9	5			4
4)タ・モク博物館（19日@Oddar Meanchey）	3.73	4	10	6	2		5
5)農村における学校訪問（19日@Oddar Meanchey）	3.86	6	9	5	2		5
6)農産物収穫と農家との意見交換（19日@Oddar Meanchey）	4.45	12	8	2			5
7)農協（Agriculture Cooperative）の取り組み（19日@Preah Vihear）	4.05	5	13	4			5
8)農村での宿泊(1)（19日@Preah Vihear）	4.73	17	4	1			5
9)保護池での魚の品種保護（20日@Preah Vihear）	3.55	4	8	7	2	1	5
10)フィールドファーマー・スクール（20日@Preah Vihear）	4.38	11	7	3			6
11)プレアヴィヒア州女性局＆農業局とのランチタイム・ディスカッション（20日@Preah Vihear）	3.64	3	11	5	3		5
12)かものはしプロジェクトのコミュニティー・ファクトリー（21日@Siem Reap）	4.77	18	3	1			5
13)アツ村とアツ小学校（21日@Kampong Thom）	4.43	14	4	2		1	6
14)サンボウプレイクック遺跡（21日@Kampong Thom）	4.14	8	9	3	1		6
15)農村での宿泊(2)（21日@Kampong Thom）	4.52	13	6	2			6
16)カンボジア特別法廷（22日@Phnom Penh）	4.74	17	6				4
17)内務省LEAPプロジェクト（23日@Phnom Penh）	4.00	8	8	6	1		4
18)JMASとカンボジアの地雷問題（23日@Phnom Penh）	4.26	11	7	5			4
19)CDP女性への暴力に対するプロジェクト（23日@Phnom Penh）	4.17	10	7	6			4
20)全体ディスカッション（23日@Phnom Penh）	4.65	17	4	2			4
21)トゥール・スレン博物館とキリング・フィールド（24日@Phnom Penh）	4.57	15	6	2			4

【現地渡航の改善すべき点】※最大3つまで選択可

項目	回答数
1)現地渡航の時期が悪い。（夏休み・冬休みの時期にすべき等）	6
2)現地渡航の日程が短い。	1
3)現地渡航の日程が長い。	2
4)訪問先が少ない。	0
5)訪問先が多い。（結果として1か所あたりの滞在時間が短い、休憩が少なく疲労が蓄積する等）	10
6)渡航先国内での移動時間が長い。（車での移動をもう少し減らすべき等）	2
7)参加者数が多い。（より少人数で訪問すべき等）	3
8)参加者同士で議論したり、他の参加者と個人的に話す時間が少ない。	6
9)現地での概要説明を受ける機会が少ない。	1
10)概要説明だけでなく訪問先での資料収集が必要。（スライドの配布や関連資料の提供を依頼する等）	7
11)航空券を除く参加費（5万円/人）が高い。	3
12)宿泊施設の質が十分ではない。	0
13)現地でのロジスティック全般（車両やガイド等）の質が十分ではない。	2

6 次回以降のスタディ・プログラムへの参加意向

項目	回答数
1)原実行委員として企画段階から深く運営に関わりたい。	10
2)訪問先やテーマに関わらず積極的に参加したい。	9
3)関心のあるテーマや訪問先であれば参加したい。	6
4)日程以外の個人的な問題（参加費の負担等）が解決できれば参加したい。	0
5)プログラムがさらに改善されれば参加したい。	1
6)参加したいが、日程以外の個人的な問題から参加できる見込みがない。	1
7)現時点では参加意向はない。	0

©UN FORUM STUDY PROGRAM

発行：国連フォーラム
編集：カンボジア・スタディ・プログラム実行委員会報告書班（田瀬和夫、神田恵梨、藤居由依、松崎映）
発行日：2013 年 4 月 6 日

＊当報告書で提供するすべてのコンテンツ（情報・文章・画像など)について、特に記載がない場合、権利者の許可なく複製・転用・販売といった二次利用をすることをかたく禁じます。